

2023 年 12 月 28 日

男子体操競技情報 31 号



公益財団法人日本体操協会
男子体操強化本部
審判委員会体操競技男子審判本部

【目次】

1	はじめに	1
2	2023 年度国内競技大会総括および指標	2
3	2023 年版採点規則修正、追加情報	5
4	難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達	9
5	タイ・ブレイクについて	30
6	2024 年度国内内規	32
7	マナー・モラルについて	33
8	第 52 回世界体操競技選手権アントワープ大会報告	34
9	おわりに	47

1. はじめに

男子体操強化本部長 水鳥 寿思

いよいよパリ 2024 五輪まで残り半年余りとなりました。体操ニッポンの関係者のみなさまにおかれましては、日ごろより選手指導、審判業務、大会運営等にご尽力いただき感謝申し上げます。

2023 年は世界選手権だけでなく、開催延期となっていたユニバーシティゲームス（2021 中国/成都）やアジア競技大会（2022 中国/杭州）が開催されるなど、様々な国際大会が行われました。その中でも、アントワープで開催された世界選手権では 2015 年以來の団体総合金メダルを獲得し、橋本大輝選手が個人総合連覇を達成するなど躍動の年となりました。こうした勢いをパリ 2024 五輪につなげていくため、本情報を最大限活用することが重要であると考えています。特に世界選手権においては想定以上にゆかのひねり不足やつり輪の力技の表現に対して減点が大きかったと感じています。今後もそうした傾向は続いていくものと考えていますし、どのようなルールや採点傾向であっても減点のない精度を目指すことが必要不可欠となります。

選手指導におかれましては完璧な美しい体操を目指すため、本情報を生かして効果的な指導を行っていただきたく存じます。審判業務におかれましては本情報を基に公平公正、かつ、選手の取り組みをしっかり評価いただけるよう研鑽いただけますと幸いです。体操ニッポンが総力を挙げ、パリ 2024 五輪での日本選手の躍動を後押ししていきましょう。よろしくお願いいたします。

2. 2023 年度国内競技会総括および指標

■ゆ か

アントワープ世界選手権種目別決勝と 2023 全日本種目別選手権決勝の D スコア平均を比較(前年比)すると、世界選手権 6.23 (+約 0.23) に対し、全日本種目別 6.00 (+約 0.05) であり、この一年間において海外選手の D スコアアップが見られる結果となった。情報 30 号でも述べたが、世界選手権において 2 回宙返りとの連続による組み合わせに注目すると、予選 37.8%、団体決勝 37.5%、個人総合 33.3% の実施が見られ、種目別決勝においては 75%となる 8 名中 6 名(前年 2 名)の実施であった。なお、2023 全日本種目別においては、1 名(前年 1 名)のみであった。世界選手権全体を通して E スコアに目を向けると、着地が動く「不安定な着地」に対する減点が厳密であったと感じた。E スコアで高得点を出す条件として、0.3 の着地減点をなくす、0.1 の着地減点を減らす、減点なしの着地を増やすことである。

2022 年 12 月公開の NewsLetter 2 では、低い着地姿勢における 0.5 の減点や足幅 10cm 以内での着地などの制限が設けられた。着地場面の多いゆかにおいては、ひねり不足の減点を含め、宙返り技のより雄大かつ正確な実施が求められてきた。春先の国内競技会では、選手それぞれが D スコアや E スコアを高めようと早い段階から準備してきた様子が伺えた。高い E スコア獲得のために必要となる静止技での静止時間やアクロバット技の前の 2 秒の停止においては、減点のない実施が増えた。また、ひねりを伴う宙返りから宙返り(ひねり)へつなげる連続技においては、ひねり不足が見られる実施は多かったが、不足する角度については小さくなってきていると感じた。しかしながら、大欠点から中欠点へ、中欠点から小欠点へ、小欠点から減点なしへと減点を減らすためにはそれぞれ 30° の幅があることから、その大変さを痛感しつつも今後の改善を期待したい。また、不安定な着地姿勢の減点項目に対応する対策として、着地を止めることを目指すことは勿論であるが、動いたとしても小欠点の範囲内で抑えることも重要である。

2024 年度は 2022 年版ルール of 集大成となる。今後も、雄大な宙返り技の実施はもちろん、技の正確性と安定した着地をすることが、高評価を得るために必要であることは間違いない。

■あん馬

春先の全日本選手権では、落下が目立った。特に技が完了した後の旋回での落下や、縦向き移動技や終末技での落下が目立ち、決勝での E スコア平均は 7.7 と、昨年を 0.1 下回った。D スコア平均は 5.8 であり、昨年大会と同じ数値であった。雄大な交差技や旋回技など一つ一つの技捌きを見てみると質の高い演技実施がみられる一方で馬体へのスリやタッチ、倒立技での力の使用など中欠点相当の減点がかさみ、思うように得点が伸びなかった。

2022 年版採点規則も 2 年目に入り、上位層の選手においては昨年から演技に取り入れてきた E 難度以上の高難度技が熟練されてきたことにより、D スコアが上がり、演技実施においてもさらなる安定感が増した印象を持った。全日本種目別選手権決勝における平均 D スコアは 6.5 であり、世界選手権種目別決勝の平均 D スコア 6.4 と比較しても大差は無かった。

アントワープ世界選手権での得点の傾向を見てみると、難度認定や減点に関しては国内競技会と大きな差はなかったと感じている。しかしながら、旋回での腰まがりや倒立での力の使用が顕著に現れる演技においては、大欠点はなくともシビアな E スコアが出ていたと感じた。また、高い E スコアを出した演技の特徴は身体を真っ直ぐに伸ばした姿勢で雄大かつリズミカルにそれぞれの技を実施した演技であった。2024 年度の国内競技会においても、今年度の基準を基盤としながらも、落下のない安定した演技実施はもちろんのこと、さらに腰高で雄大な旋回技と、停滞無く上昇する倒立技を求めている。

■つり輪

より正確性の求められる厳しい種目ではあるが、4月の全日本から夏の大会までに、その実施の正確性を追い求め、Eスコアを0.1でも拾うべく改善されていく様が競技会を重ねる中で大変強く感じ取ることが出来た。本年度の全日本種目別決勝におけるDスコアの平均は6.1であり、昨年度とほぼ横ばいであったが、Eスコアの平均は、昨年度は8.154であり、本年度は8.304であった。単純に比較は出来ないが、質の向上が見受けられる一つの結果とを感じる。

アントワープ世界選手権の予選において、EGⅡのD難度以上の実施された技で最も多い技は「ナカヤマ」が29演技、次いで「中水平支持」の24演技、そして「アザリアン」が23演技と同数程度の割合で実施されていた。EGⅢについては、最も多く実施された技が「後ろ振り上がり水平支持」の42演技であり、次いで「後ろ振り上がり中水平支持」が40演技であった。「ホンマ十字懸垂」においては僅か10演技だった。また、国内においては、「後ろ振り上がり中水平支持」が多い傾向は同様であったが、「ナカヤマ」の出現数は少なく、逆に「ホンマ十字懸垂」の実施率が多いなど、世界選手権の実施率とは異なる傾向にあった。

パリオリンピックを目前に控え、より正確な演技実施が求められる傾向に変わってきた。選手の演技は審判員によって、採点規則に記されている減点項目に従って忠実に、そして厳密に判断される。それは一つの技に対して一つの減点項目だけがあるのではなく、振動からの静止技であれば、「持ち込み角度」、「静止姿勢」、「静止角度」、「時間」、「揺れ」、「握り」といった幾多の減点項目がある。それらを一つ一つクリアしなければ、それらの欠点に相当した減点が課せられる事は明白である。そのため、選手、コーチの皆様には2022年版採点規則並びに本情報に掲載されている「演技実施上の確認事項」を熟読し、各減点項目を理解したうえで対応していただきたい。

日本らしい雄大で軽快な振動技からの美しい倒立などの武器をアピールしつつ、つり輪特有の力強さを表現して、強く美しい日本の体操を体現することを期待している。

■跳馬

昨年度までと変更点もなく各競技会が行われた。種目別以外の競技会は1跳越であるため、個人総合で上位を目指す選手にとっては、全体のDスコアを上げるためにも、跳馬においてDスコア5.6以上の跳越技が必要となってきた。また、今後世界選手権やオリンピックの団体を戦う上でDスコア5.6以上の選手が何人いるかが、跳馬の優劣を決める鍵となる。今年の世界選手権団体予選にて、4選手全員がDスコア5.6以上の跳越技を揃え、内3選手が2本の跳越技を実施し、その全てをDスコア5.6以上で揃えた国があった。さらに、跳越技のバリエーションも多彩であった。

その一方で、Dスコアの高い跳越技を実施しても、正確な実施ができていなければ高得点は出ないということが明確になっており、膝やつま先などの姿勢欠点や着地姿勢の低さなどがみられる実施に対しては自ずと減点が重なり、実施内容によっては転倒した実施と同等のEスコアが出ることもあった。

国内の種目別選手権においては、2本の跳越技の内の片方でローチェを実施する選手が多くみられた。しかし、その完成度は決して高くはなく、多くの選手が第1局面の早い段階での膝まがりや、着地が大きく乱れるといった大きな減点を被った。また、着地はまとめたものの、第1局面や第2局面での脚開きやつま先のまがりを減点覚悟のまま実施している選手が多かった。

いかにせよ、雄大で大きさがあり着地の準備をしっかりと見せ腰高で着地を止める。このような跳越（特に高い価値点の跳越）は評価されるであろう。減点箇所を一つ一つ懇切丁寧に改善していく努力が今後必要となってくると感じている。

■平行棒

2022 年版ルール適用が 2 年目に入り、演技構成での技の配分に関して、方向性が固まりつつあると感じた。D スコアを上げるために一番実施が増えた技は「マクーツ」であり、その積極性は評価に値する。しかし、技の途中の単棒横向き倒立の際に停滞することなく技を続けた選手はほぼおらず、まだ改善の余地があると感じた。また、「後方車輪ディアミドフ」や「シャルロからの単棒ヒーリー」が高難度に位置づけられたが、実施数はごくわずかであった。

来年度に向けた指標を述べるため、今年度アントワープで行われた世界選手権に関する分析を記載する。全 196 演技中、落下・転倒があった 31 演技を除いた 165 演技の E スコアの平均は 8.250 であり、跳馬に続いて高いスコアであった。団体総合における平行棒のチーム得点は、予選・決勝とも日本はトップであり、E スコアにおいても予選平均 8.577、決勝平均 8.488 と、いずれもトップの得点であった。この結果により、選手、コーチが着実に強化し、国内で高く評価した演技が世界でもそのまま評価されたとの結論を得た。よって、2024 年度に向けた指標は 2023 年度と同じ方向性で評価することとする。なお、主な項目は以下の通りである。

- 棒下宙返り倒立系の技において、肘をまげることなく実施された技を評価する
- 角度減点の無い、正確に倒立位におさめられた技を評価する
- 2 秒の静止が求められている技において、明確に 2 秒間静止した技を評価する
- 腰、頭の位置が高く、ひらきがあり、正確に着地が止まった終末技を評価する

上記の項目は、一部の国内トップクラスの選手の演技では昨年からすでに満たされていたが、国内競技会全体としてはまだ減点の多い項目も散見される。1 人でも多くの選手から 9 点台の E スコアにふさわしい演技が見られるよう、今後の強化に期待する。

■鉄 棒

2022 年版のルール改定により、昨年度から「閉脚エンドー」や「閉脚シュタルダー」を取り入れた演技実施が多く見られるようになり、昨年度は脚の入れや抜きの際に足先がバーに接触してしまう実施が多数あり、「器械に触れる」または「器械にぶつかる」といった減点項目に該当する実施が多く散見されていたが、今年度においては改善が見られてきたように感じる。しかし、バーの下を通過する際の体の姿勢においては、まだまだ改善しなければいけない実施が多く見られた。

また、手放し技において、高さ不足や脚開き、バーをつかむ際の肘まがりなどの減点がある実施の場合、その後に続く車輪においても、腕がまがったり、停滞や手ずらしがあったりすることが多く、落下はなくとも多くの減点が発生した事例も散見された。手放し技でバーを再び握る際の肘まがりの減点は 0.30 までであるが、その後に続く車輪でそれ以上の減点が科せられてしまうこともあるため注意が必要である。もちろん、身体をひらき、かつ肘を伸ばしてバーを握りにいくことは、落下の危険と隣り合わせとなってしまうが、安定して良い位置で握る事が望まれる。

その他の減点としては、「アドラー1回ひねり逆手倒立」、「リバルコ」、「シュタルダーリバルコ」などの技において角度逸脱の減点の中欠点または大欠点を伴う実施も多く見られた。

D スコアにおいては、昨年の全日本種目別決勝スコアの平均が 5.925 対し今年度は 6.0 とアップしている。今年度、アントワープで行われた世界選手権の種目別決勝の平均 D スコアが 5.87 であったことを考えると、国際的に見ても国内上位選手の D スコアは高い傾向にある。また、世界選手権でも日本の予選 D スコア平均は 6.066 と全体のトップであった。とはいえ、鉄棒という種目は最終種目の順位を決定するとても緊張する重要な種目となることが多いため、より正確で安定した演技実施が求められる。来年度にはパリオリンピックを控え、2022 年版ルールも集大成となる。より高い D スコアで、雄大で美しい日本の体操を体現し、今後の更なる強化を期待したい。

3. 2022 年版採点規則修正、追加情報

I. 2022 年版採点規則正誤表

日本語版 2022 年版採点規則の追加・誤植等による訂正

(1) 本文

該当箇所	変更種類	変更内容 (赤字部分追加)
P.19 7-1 条 4.	文章追加	技(同一番号を持つ技を含む)は繰り返すことができるが、繰り返された技は D スコアに關与することはない。ただし、成立しなかった技を再び実施し、認められた場合は難度が与えられる。
P.21 7-5 条 3.	文章追加	繰り返した技(同一技番号の技)の難度や組合せ加点は与えられない。ただし、成立しなかった技を再び実施し、認められた場合は難度が与えられる。
P.27 9-3 条 2. b) i.	文章追加	技を繰り返すことは認められるが、難度や組合せ加点を得ることはできない。しかしながら、それらの実施も E 審判によって評価される。ただし、成立しなかった技を再び実施し、認められた場合は 難度および組合せ加点が与えられる。

(2) 難度表

該当箇所	変更種類	変更内容 (赤字部分追加)
P.113-125 平行棒難度表	ジュニア禁止技の●追加	I-48, III-10, 50, 52, 53, 58, 59, 60, 64, 66, 77, 78, 123, 124, 125, 126

II. 2022 年 6 月以降に公開された FIG 情報における Code of Points (採点規則) の追加・変更一覧

※引例資料 FIG Code of Points(July 2022 版), FIG NewsLetter No.01(June 2022), No.02(December 2022), No.03(July 2023) 部分は 2023 年 7 月公開の NewsLetter 3 にて新たに公開されたもの。

(1) 一般条項

該当箇所	変更種類	変更内容 (赤字部分追加)
P.8 2-4 条 罰則	項目追加	e)違反とそれに伴う罰則は次のとおり

(2) ゆか

該当箇所	変更種類	変更内容 (赤字部分追加)
P. 45 III-72	技の追加	後方かかえ込み 2 回宙返り 7/2 ひねり (ミナミ) H 難度 

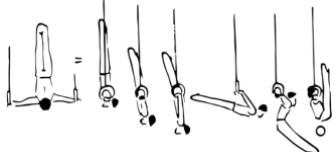
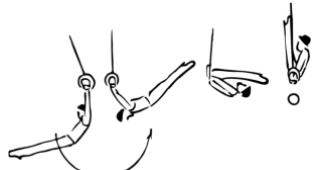
(3) あん馬

該当箇所	変更種類	変更内容 (赤字部分追加・変更)
P.51 11-2 条-2 2. a.10)	文章変更	後方移動技において、選手は馬端馬背の外向き背面支持から技を開始することができる。

P.52 11-2 条-2 2. c.4)	表変更	2 (開脚) 旋回倒立下ろして (開脚) 旋回技 <table><tr><td></td><td colspan="3">倒立</td></tr><tr><td></td><td>“B”</td><td>“C”</td><td>“D”</td></tr><tr><td>下ろして (開脚) 旋回</td><td>C</td><td>D</td><td>E</td></tr><tr><td>「360° (以上) ひねり」または「3/3移動」</td><td>D</td><td>E</td><td>F</td></tr><tr><td>「360° (以上) ひねり 3/3移動」</td><td>E</td><td>F</td><td>G</td></tr></table> ※3/3移動は少なくとも180° のひねりが必要		倒立				“B”	“C”	“D”	下ろして (開脚) 旋回	C	D	E	「360° (以上) ひねり」または「3/3移動」	D	E	F	「360° (以上) ひねり 3/3移動」	E	F	G
	倒立																					
	“B”	“C”	“D”																			
下ろして (開脚) 旋回	C	D	E																			
「360° (以上) ひねり」または「3/3移動」	D	E	F																			
「360° (以上) ひねり 3/3移動」	E	F	G																			
P.61 II-81	技名の追加	正面横向き支持から一腕上下向き 270°転向一把手支持 (ダフチャン) C難度																				
P.64 III-28	技の追加・変更	縦(横)向き 3/3 移動直ちに 1/2 ひねり (把手～把手を越えて) (ティトフ) D難度 *ニンレイズと同枠 																				
P.64 III-35	技の追加・変更	縦(横)向き 3/3 後ろ(横)移動 1 回ひねり (2 回の旋回以内で) (バークハート) E難度 *ウルジカ 2 と同枠 																				
Ⅲ-(技番号未定)	技の追加	両把手を越えて開脚旋回縦向きとび後ろ移動 (リード) E難度 																				
Ⅳ-(技番号未定)	技の追加	両把手から 1/4 転向、ただちに一把手上ロシアン 270° 転向倒立下り (ドリーゼ) D難度 																				

(4) つり輪

該当箇所	変更種類	変更内容 (赤字部分追加・変更)
P.70 12-2 条-1 2.	文章変更	演技開始時は腕と体を伸ばした正しい姿勢で懸垂しなければならない。腕が垂直でない場合は小欠点となる。また、静止のない懸垂姿勢から力技に続けた場合、振動を利用したとして減点の対象となる。
P.71 12-2 条-2 5. g)	文章変更	背面懸垂は、(脚上挙)十字懸垂へ引き上げる開始の姿勢としては認められず、十字懸垂(や他の力静止技)の難度を高めることはできない。もし、(脚上挙)十字懸垂が直接、背面懸垂姿勢から引き上げられた場合は、採点規則上の単独の難度(それぞれ B または C)を得ることとなる。
P.81 II-81	技番号変更	II-81 → II-75
P.85 III-45	技番号変更	III-45 → III-57
P.85 III-46	技番号変更	III-46 → III-40
P.85 III-47	技番号変更	III-47 → III-59
P.85 III-48	技番号変更	III-48 → III-60
P.86 III-51	技番号変更	III-51 → III-39
P.86 III-52	技番号変更	III-52 → III-34

P.86 Ⅲ-53	技番号変更	Ⅲ-53 → Ⅲ-71
P.86 Ⅲ-54	技番号変更	Ⅲ-54 → Ⅲ-42
P.86 Ⅲ-57	技番号変更	Ⅲ-57 → Ⅲ-45
P.86 Ⅲ-59	技番号変更	Ⅲ-59 → Ⅲ-47
P.86 Ⅲ-62	技番号変更	Ⅲ-62 → Ⅲ-56
P.86 Ⅲ-64	技番号変更	Ⅲ-64 → Ⅲ-58
P.87 Ⅲ-76	技番号変更	Ⅲ-76 → Ⅲ-46
P.87 Ⅲ-89	技番号変更	Ⅲ-89 → Ⅲ-65
P.87 Ⅲ-95	技番号変更	Ⅲ-95 → Ⅲ-77
P.88 Ⅲ-101	技番号変更	Ⅲ-101 → Ⅲ-53
Ⅱ-(技番号未定)	技の追加	十字倒立からゆっくりと下ろし逆懸垂経過、伸腕伸身逆上がり脚上 挙十字懸垂（2秒）（ゾウ・ジンヤン）E 難度 
Ⅱ-(技番号未定)	技の追加	ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり十字倒立（2秒） （シーモノフ）F 難度 
Ⅲ-(技番号未定)	技の追加	ホンマ脚上挙支持（2秒） （グラシア）C 難度 

(5) 平行棒

該当箇所	変更種類	変更内容（赤字部分追加・変更）
P.110 14-2 条-2 3. h)	文章変更	ヒーリー、マクーツ系および前方宙返り支持系の技において、支持する際に肘が大きく(90°を超えて)まがった場合、難度は不認定となる。
P 110 14-2 条-2 4. a)	文章変更	終末姿勢や姿勢の異なる同じ種類の宙返り技を行うことはできない。（同グループ内） 以下の場合、最も高い難度のものをカウントする。 例： かかえ込みモリスエと屈身モリスエ ： かかえ込みバーレと屈身バーレ ： 前方宙返り開脚抜き腕支持と屈腕支持、または直接懸垂になる技（Ⅱ-53、Ⅱ-54 を含む） ： 懸垂前振り後方宙返りひねり系の技（Ⅲ-64、65、71、77）
P.112 I-1	技名変更	後ろ振り（単棒）倒立（2秒）
P.117 Ⅱ-15	技名変更	ほん転 1/4 ひねり単棒横向き倒立経過 1/4 ひねり倒立（コフトゥン）
P.117 Ⅱ-6	技名変更	前振り上がり 3/4 (1/4) ひねり単棒倒立 *単棒横向きけ上がり系の技に繋がった場合

P.123 III-73	技名変更	け上がり支持
P.122 III-64	技名の追加	懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持 (マツナガ) D 難度

(6) 鉄棒

該当箇所	変更種類	変更内容（赤字部分追加・変更）								
P.130 15-2 条-1 1.	文章追加	選手は、両足をそろえた直立姿勢もしくは短い助走からジャンプするか、補助により正しい懸垂姿勢にならなければならない。採点は、選手の足がマットから離れたときから開始される。演技開始の振り出しは、最大3回のスイングが認められる。3回を超えたスイングは 0.3 の減点を伴う。前や後ろへのいかなる動きもスイングとして数える。さらに、とびつきのスイングや、コーチが選手を押して振動を与える場合もスイングとして数える。								
P.133 15-2 条-2 17.	文章追加	伸身トカチェフについて バーを再び持つまで、全て伸身で実施しなければならない。バーを越える前に 45°以上の腰まがりがある場合、屈身トカチェフ(C 難度)として認定される。バーを越えたのちに 45°以上の腰まがりがあった場合はD 難度として認定するが、相応の減点がある。さらに明確化すると、これは、足先がバーの上を通過する時に身体がまっすぐでなければならないことを示している。								
P.134 15-3 条	減点の変更	<table><tr><th>欠 点</th><th>小欠点 0.1</th><th>中欠点 0.3</th><th>大欠点 0.5</th></tr><tr><td>エンドー、シュタルダー、ワイラーの技の開始時における倒立位からの逸脱</td><td></td><td>+</td><td></td></tr></table>	欠 点	小欠点 0.1	中欠点 0.3	大欠点 0.5	エンドー、シュタルダー、ワイラーの技の開始時における倒立位からの逸脱		+	
欠 点	小欠点 0.1	中欠点 0.3	大欠点 0.5							
エンドー、シュタルダー、ワイラーの技の開始時における倒立位からの逸脱		+								
IV-(技番号未定)	技の追加	バーを越えながら、後方伸身2回宙返り 3/2 ひねり下り（フォーク）E 難度 								

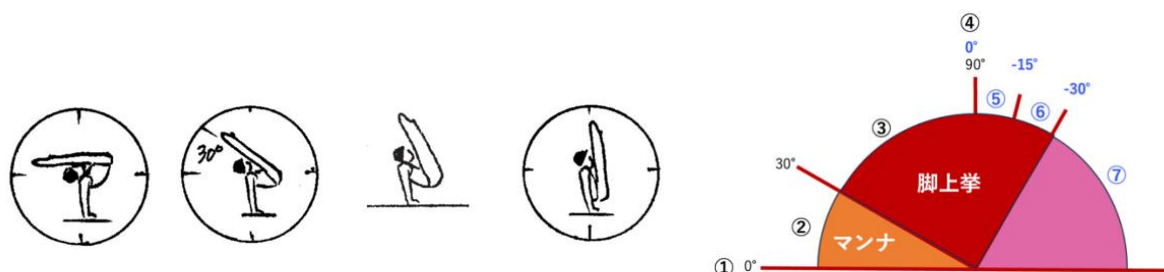
4. 難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達

■ ゆ か

1. 難度認定上の確認事項

- 1) すべての力倒立技は静止が必要であり、静止時間と技の認定に関してはより厳密に判定する。
- 2) 力倒立において、倒立へ上げる際に手で歩いた場合や脚下がりが見られた場合は、力倒立に対する価値は認められない。しかしながら、その後倒立に持ち込み、静止が見られた場合は、倒立（I-19）としての価値のみ認められる。
- 3) 二つの力技で一つの難度を得る技において、片方に静止がみられなかった場合は、もう片方の低い難度のみを認定する。
例) マンナ(1秒)から伸腕屈身力倒立(静止無し)を行った場合、マンナのC難度のみを認定。
水平支持(静止無し)～伸腕伸身力倒立(2秒)を行った場合、倒立のA難度のみを認定。
- 4) 開脚座から伸腕屈身力十字倒立において、開脚立ち姿勢が見られた場合はB難度と判定する。
- 5) マンナから肩転位して倒立（I-16）は、双方の姿勢での静止を必要とする。
- 6) マンナと脚上挙の認定については、脚の角度により判定する。なお、マンナの正しい姿勢は脚が床面と水平な状態である。【FIG NewsLetter 3】

脚が水平まで持ち込まれない場合でも、 30° までの不足はマンナとして認定。①②
 脚が垂直よりも上げられた姿勢であれば、角度減点のない脚上挙として認定。③
 脚が垂直まで持ち込まれない場合でも、 30° までの不足は脚上挙として認定。⑤⑥
 脚が垂直まで 30° を超えて不足した場合には脚上挙として認定されない。⑦



- 7) エンドー（I-68）の正しい捌きは、手から着地し、コントロールされながら正面支持臥に入ることである。下の図（右）は、D 審判によって不認定となり、E 審判によって不安定な着地の減点がなされる例である。

【FIG NewsLetter 2】



《正しい捌き》

《不認定となる捌き》



- 8) 旋回ひねり倒立系の技は、ひねりの動作から直接倒立に持ち込まなければならない。
- 9) ゴゴラーゼのように倒立から下して旋回を行う技は、技が完了する際に明確な正面支持を示さなければならない。

10) シュピンデル倒立技について

1つの独立した技として認定されるために、シュピンデル（I-92）は最大2回の旋回（開始姿勢から3回の正面支持）で実施されなければならない。【FIG NewsLetter 2】



EG I-93, 100においては、5回目の支持となる背面支持で360°ひねりが完了していなければならない。倒立への持ち込み動作は6回目の支持で完了する。【FIG NewsLetter 3】



11) 両足旋回から続けられたロシアン転向技は、両足抜きの後の正面支持から転向度数を数える。

両足旋回をせずにロシアン転向技を実施した場合、最初の正面支持から転向度数を数える。

12) 特別な繰り返し

演技中、最大2つまでの力技（力倒立技群含む）と、2つまでの開脚・閉脚旋回技、ロシアン系の技を実施することができる。3つ以上実施した場合は各々難度の高いもの2つを認定する。

13) 組合せ加点は「加点対象となる技の組み合わせ（下表左）」を、「加点対象となる難度の組み合わせ（下表右）」で実施した場合に与えられる。

●加点対象となる技の組み合わせ方

2回宙返り + B難度以上の宙返り

↑逆も可

ひねりのない1回宙返り + D難度以上の宙返り

(B 難度) ↑逆も可

●加点対象となる難度の組み合わせ方

D 以上 + D 以上 = 0.20

D 以上 + B or C = 0.10

↑逆も可

14) 大欠点のある場合は組合せ加点が認められない。また、着地の際に瞬時のコントロールも示さないような実施も、組合せ加点の対象としない。

15) 組合せ加点に関わる宙返りは、Dスコアにカウントされる技に含まれていなければならない。

16) 3技連続した場合は双方に組合せ加点が与えられる。(例) B+D+B=0.2

17) 組合せ加点が与えられる回数に制限はない。

18) ひねりを伴う1回宙返り技どうしが直接つながっていても、組合せ加点は与えられない。

19) 切り返し系の宙返り技には組合せ加点は与えられない。

20) 繰り返された技やグループが5技を超えて削除された技との組み合わせは認定されない。

21) 難度表に載っていない1回宙返りでのひねり技（後方かかえ込み宙返り2回ひねり等）が実施された場合は、伸身で行った場合の難度を与えるが、E審判によって減点される。

22) アクロバット技で部分的に膝がまがった場合においても技の難度が下がることはない。

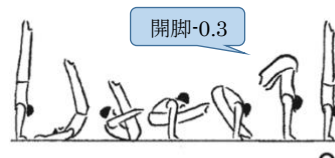
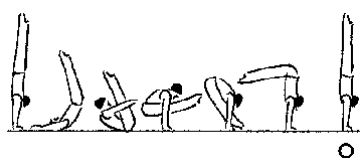
例) 前方伸身宙返り1回ひねりで着地の前に膝がまがった場合でも、前方伸身宙返り1回ひねりとして認定することができるが、あいまいな姿勢(かかえ込み・屈身)として減点される。

23) 技は繰り返すことはできるが、繰り返された技の難度や組合せ加点は与えられない。しかしながら、それらの実施もE審判によって評価される。また、成立しなかった技を再び実施し、認められた場合は難度および組合せ加点が与えられる。

- 24) 演技は両足を揃えて着地する跳躍技で終了しなければならない(グループ I では満たせない)。
- 25) ゆかにおいて、演技の最後に実施した技(跳躍技に限る)を終末技と判定し、グループIVの価値が与えられるが、同時にその技はグループ II または III の一つとしても捉えられる。終末技を含めて同一グループの技が 6 技以上あった場合は、終末技を最初にカウントし、最も難度の低い技から除外される。
- 26) グループ II または III の技が終末技のみで実施された場合(その他では実施なし)、その技はグループIVとみなされ、グループ II または III の技としての価値(0.50)は与えられない。
- 27) 終末技で、既に実施された技が繰り返された場合、終末技の難度とグループは与えられない。

2 演技実施上の確認事項

- すべての力技(力倒立技群含む)は静止が必要である。静止時間が 2 秒に満たない場合の減点(0.30)、静止が見られない場合の減点(0.50)。
- 十字倒立への経過で、速いリズムで倒立に持ち込む捌きの減点(0.10)。
- 十字倒立は足を閉じなければならず、頭部が床面から手のひらの厚さ以内にあること。
- ロシアン転向技で反り身の目立つ姿勢は減点(0.10)。
- 前転脚前挙支持経過閉脚倒立(I-45)で開脚倒立した場合、無価値な開脚として減点(0.30)。
《正しい捌き》 《減点を伴う捌き》



- 6) 脚上挙支持は、上半身と脚部に開きがある捌きは柔軟性に欠ける減点(0.10、0.30)。

- 7) 脚上挙とマンナの角度減点について

【FIG NewsLetter 3】



- 脚が床面と水平で減点なし
- 脚が水平まで持ち込まれない場合でも、30° までの不足はマンナとして認定。角度減点(0.10)
- 脚が垂直よりも上げられた姿勢であれば、角度減点のない脚上挙として認定。
- 脚が垂直まで持ち込まれない場合、30° までの不足は脚上挙として認定。15° までの不足の減点(0.10)、15° を超えて 30° までの不足の減点(0.30)
- 脚が垂直まで 30° を超えて不足した場合の減点(0.30)

角度	技	減点	
0°	マンナ	なし	脚が床面と水平
> 0° -30°	マンナ	0.1	
>30° ~90°	脚上挙	なし	
90° 0°	脚上挙	なし	脚が床面と垂直
>0~-15°	脚上挙	0.1	
>-15~-30°	脚上挙	0.3	
> -30°		0.3	不認定

- 8) 倒立へ上げる途中での脚の下がり、第9-3条 2 項 d) に則って減点の対象となる。元の位置から(15°まで: 0.10、>15°~30°: 0.30、>30°~45°: 0.50、45°を超える: 0.50不認定)
- 9) アクロバット技間の動き・コレオグラフの工夫は演技の持ち味となるが、無味乾燥とした動き、指先まで意識されていない姿勢不良に対しては減点。

- 10) アクロバット技などの前に 2 秒以上停止してはならない (0.10) 。 2 秒の計測は選手が立った瞬間に始まり、単純な腕の動きなども停止時間に含まれる。
- 11) 宙返りの着地後すぐにコーナーなどへ移動する捌きは、安定した着地をとることができる実施を前提とし、不安定な着地姿勢からの移動は実施減点 (0.10、0.30、0.50) 。
- 12) コーナーでの単純な場所取りや方向転換、単純なステップや移動の減点 (0.10) 。
※180°以上のターン、ジャンプ、脚を水平以上に挙げる動きが含まれなければならない。
- 13) かかえ込み宙返りにおいてあいまいなかかえ込み姿勢の減点 (0.10、0.30) 。
- 14) 一つの宙返り技の脚の開き等の減点は一か所に集約する。
例) わずかに脚が開いた 2 回宙返り≠0.20。
- 15) アクロバット技のやや高さが無い実施の減点 (0.10) 。
- 16) アクロバット技でひねり不足がある場合の減点 (0.10、0.30、0.50) 。
- 17) アクロバット技の連続で安定した着地を示しても高さ(浮き)がない場合の減点(0.10、0.30)。
- 18) 着地姿勢が低い、または余裕のない着地に対する減点 (第9-4条 その他の技術欠点)
(0.10、0.30、0.50) 。
- ※腰が膝より下にある場合、低い着地姿勢に対する減点 (0.50)。【FIG NewsLetter 2】
- 19) 着地後、明らかに手や膝で支えるような場合は転倒と判定 (1.00) 。
- 20) 宙返りの着地で転倒した場合の減点は最大1.00とする。3 歩動いて転倒≠1.30。
- 21) 宙返りの着地後に即時ジャンプをして臥せる捌きは欠点 (0.50) 。
- 22) 宙返りや終末技での着地において、選手は安全上の理由により脚を開いて着地をすることができる。最初の着地で足が10cmを超えて開いた場合、つま先を浮かさず踵を揃えたとしても0.10または0.30の減点となる (9-4条 着地で脚を開く) 。【FIG NewsLetter 2】
 - ・ 10cm以内に脚を開いて着地し、つま先を浮かさず踵を閉じる・・・・・・減点なし
 - ・ 10cm以内に脚を開いて着地し、脚を上げて踵を閉じる、または、脚を閉じない・・0.10
 - ・ 肩幅を超えて脚を開いて着地し、脚を上げて踵を閉じる、または、脚を閉じない・・0.30
- ※その他全ての実施減点 (宙返りの空中局面や着地準備の際の身体の開き) も常に評価の対象となる。

3 ニュートラル・ディダクション (ND)

- 1) すべてのコーナーを使わない・・・・・・0.30
※最終タンブリングが未使用のコーナーへ向かった場合、そのコーナーを使用したとみなす。
- 2) 3 回を超えた同じ対角線の連続使用・・・・・・0.30
※同じ対角線を 3 回続けて使用した場合、その次にゆかフロアの一边(サイドライン)を使用して、別のコーナーに向かわなければならない。
- 3) 2 回 (3 回) 宙返り技がない・・・・・・0.30
- 4) フロアエリア外で技を開始する・・・・・・価値は認められない

■ あん馬

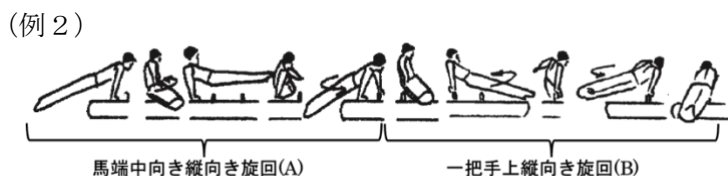
1. 難度認定上の確認事項

- 1) 一把手上で行うすべての交差倒立技は、倒立の前後で支持の手あるいは把手を替えなければならない。
 - 2) すべての交差技の終了姿勢は脚を前後に開いた開脚支持である。その際、大腿部や臀部が馬体に乗った場合は難度不認定となる。
 - 3) 交差倒立技は身体が伸びた姿勢のまま倒立に持ち込まなければならない。腰が 90° 以上まがった実施や、足先が両把手間上を通過した実施は難度不認定となる。【FIG NewsLetter 2】
- 
- 4) 交差倒立技において、技の前後に難度を上げることを目的とした動きを付け加えることはできない。例) リーニン (I-4) に、とび動作を加えても難度の格上げは認めない。
 - 5) 交差倒立技で片手が把手から下りて把手に戻った後、さらにどちらかの手が把手から下りた場合は難度不認定となり、E 審判は 0.50 (演技停止) または 1.00 (落下した場合) + 他の実施減点となる。
 - 6) 倒立位を経過する交差技や終末技において、倒立への上昇局面で足先が下がったり、著しく停滞したりした場合は難度不認定となる。
 - 7) グループ II および III のすべての技は、次の技に続けなければ難度は与えられない。実施された技の終末姿勢 (正面支持) に続いて、少なくとも 180° を超える旋回 (背面支持) または転向 (正面支持) を示した後に落下した場合、その技は認定される。(例外: 両足で旋回の入れ後、片足で残りの半円を終了し、その後に片足振動技・交差技を続ける。)
 - 8) 他に記載されていない限り、すべての旋回技の開始と終了は正面支持である。下向き転向 (伏臥) やショーンにおいて背面支持から片足振動技につなげた場合は難度不認定となる。
 - 9) ショーン (II-65) とベズゴ (II-83) は両把手正面支持から全転向し両把手正面支持で完了する技である。両把手正面支持で技を完了できなかった場合これらの難度は認められない。
 - 10) ショーンとベズゴは立位から (旋回無しで) 行くと、2 段階の格下げとなる。
 - 11) ベルトンチェリと $3/4$ ベズゴ (ダフチャン) は両把手正面支持から始まり、一把手上縦向き正面支持で完了する技である。ベルトンチェリの終了時に 90° 転向を加えて一把手上横向き正面支持になった場合は難度不認定となる。
 - 12) ロシアン転向 (移動) 技、移動技、フロップ、コンバインで落下した場合は部分的な難度は認定されない。
 - 13) フロップ、コンバインの途中で手が一把手上から下りて落下せずに次の技に続けた場合は、完了している部分までの難度を与える。
例 1) SL=S (B) と L (B) を認定
例 2) LL=L (B) を認定
 - 14) フロップとコンバインは直接続けることができず、少なくとも片手が一把手上から下りた旋回を挟まなければならない。
 - 15) ロシアン転向技において、下向き転向の動作から始められた場合の開始局面は、正面支持になったところである。
 - 16) **ブスナリ系の技において倒立で 360° を超えるひねりの実施であっても同等の価値が認められる。**【FIG NewsLetter 3】
 - 17) マジャールまたはシバドを開脚旋回で実施する場合は、開始姿勢から終了姿勢まで常に開脚でなければならない。

- 18) 縦向きとび前移動（馬端～馬端）（Ⅲ-42：ドリッグス）は、明確なとびの後、両手同時正面支持を示した場合にF難度と判定し、それ以外はE難度（Ⅲ-41）と判定する。
- 19) 縦向き前移動技における開始および終了局面は縦向き正面支持である（例外：マジヤール～シバド直接連続）。例えばマジヤールの終了姿勢で、縦向き背面支持姿勢を示した後に 90° 転向し、横向き正面支持で終了した場合（下図参照）は「縦向き前移動 2/3 部分（Ⅲ-38：B 難度）」として判定する。【FIG NewsLetter 1】



- 20) 馬端中向き縦向き旋回（A 難度）の終了局面は片手が一把手上でも良いが、それに続く技が縦向き前移動系の技である場合は、その縦向き旋回は移動技の一部となるため、認定されない（例 1）。続く技が一把手上旋回系の技であればどちらも認定される（例 2）。



- 21) マジヤール～外向き縦向き旋回～シバドを実施する場合の外向き縦向き旋回（A 難度）は馬端外向き正面支持から始まり、馬端外向き正面支持で終了となる。

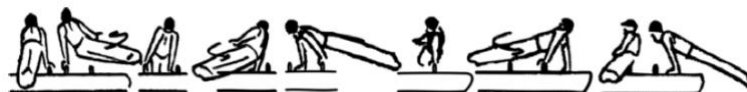


- 22) 以下に記載する技は特例として、技の開始時において正面支持姿勢がなくても技を認定する。

① マジヤールからシバドへの直接連続

マジヤールで馬端外向き縦向き背面支持に至った後、ただちにシバドを実施した場合、マジヤール完了の正面支持がなくても認められる。

② 両把手上での横向き正面支持から、両足入力で 90° 上向き転向しながら片手をあん部馬背に下ろし、縦向き後ろ移動（1/2 部分）



③ 馬端馬背外向き背面支持からのシバド



- 23) 縦向き後ろ移動の終了姿勢は中向き縦向き正面支持でも、横向き正面支持でも認められる。もしもシバドからロシアン転向技を実施する場合は、技が終了した正面支持（縦向きまたは横向き）から転向度数を数える。
- 24) 馬端馬背外向き背面支持から下向き転向移動技を実施した場合は、90° 転向した後の横向き正面支持姿勢を技の開始とする。

① ロシアン 270° 転向 (IIA)



② 把手を挟んだ横向き支持からロシアン 360° 転向移動 (III C: クロル)



④ 馬端横向き支持からロシアン 630° 転向移動 (IIID)



- 25) ウ・グォニアンは、あん部馬背支持に達するまでに 360° の転向を完了し、残りの 360° の転向を馬端馬背支持に達するまでに完了しなければならない。3 部分移動が完了した時点で 360° を転向し、続けて馬端馬背支持で 360° の転向をするような捌きは 2 技と見なす（ロス+ロシアン 360° 転向）。
- 26) ウ・グォニアンの後に、あん部馬背ロシアン 180° を続けた場合、E+A を獲得することができる。「〜° 以上」という言葉は移動中の転向を指す。
選手の両手が開始から逆の馬端馬背に達し、720° の転向移動が完了したようであれば、転向移動は完了したものとみなされ、いかなる採点規則掲載の技も新たに行うことができる。
- 27) いかなる転向移動技もその後に続くロシアン転向技によって難度が上がることはない。
例) トンフェイから下向き転向下り (D + A)
ロスから下向き転向 360° (D + B)
- 28) モギルニー (III-58) とベレンキ (III-64) は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。
- 29) ロシアン転向下りは、常に馬端中向き縦向き正面支持から開始とする。
- 30) 終末技は 1 回に限りやり直すことが認められる。ただし、落下減点 (1.00) と実施減点を伴う。
ポディウム (演技台) が設置されている場合、(階段を含め) ポディウムから下りた時点で、終末技をやり直す権利は失効となる。
- 31) 終末技は旋回技から実施しなければならない。片足振動技や不十分な旋回技からの倒立下りは終末技として認定しない。
- 32) 倒立を経過する終末技の途中で中断して下りた場合、移動やひねりが含まれていれば馬体を越えていなくても技の成立した部分までの難度を認定する。
例) DSA 倒立 3 部分移動 270° ひねり下り (D 難度) で、3 部分移動後にひねりが足りずに逆側に下りた場合、DSA 倒立 (C 難度) までを認定とする。
- 33) 倒立で 3 部分移動をする終末技において、最後の片手に重心が乗らず、触れた程度であった場合や、馬体の側面を使用した場合は 3 部分の使用とは認めず、難度の格上げはしない。
- 34) 終末技において、明確な足からの着地が見られずに転倒した場合は、難度不認定となる。

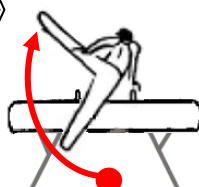
2. 演技実施上の確認事項

- 1) 交差技以外の片足振動技においても大きさのない実施は減点となる (0.10、0.30)。
- 2) とび交差技や交差横移動技についても、大きさの減点は交差技と同様に扱う。
- 3) ミクラック系の技において、技が完了する前に脚で支えた場合にはその技は不認定となり、落下なしに演技を中断したとして 0.5 の減点となる。【FIG NewsLetter 3】

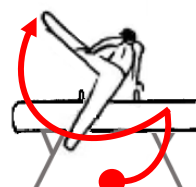


- 4) 片足振動技で開始する際の余分な予備振動は 0.30 の減点となる。半振動は認められる。

《減点無し》



《予備振動・0.3》



- 5) 倒立を経過する交差技は振動で実施されるべきであり、腰をまげて倒立位に持ち込む捌きに対する減点は0.10または0.30であり、90° 以上で0.50となる。また、倒立で足を閉じない場合は、0.10または0.30の減点となる。
- 6) 縦向き旋回と移動において正しい向きからの逸脱は減点の対象である (0.10、0.30、0.50)。
- 7) 縦向き移動技で移動した後の終末局面で向きが不正確な実施は減点の対象である。
- 8) 縦向き移動技の向きの逸脱や着手位置のずれは旋回 (一部分移動) ごとに減点の対象である。
- 9) 縦向きの移動技において、馬端やあん部馬背での支持の際の手のずれは角度逸脱の減点の対象となるが、移動する動作での角度逸脱に対する減点はない。例えば、縦向き後ろ移動 (1/2 部分) のあとの中向き正面支持において 33° の逸脱があった場合は、0.3 の減点となる。この逸脱は次の技の移動動作とはみなされない。【FIG NewsLetter 3】



- 10) フロップ・コンバイン技は一転向、一旋回ごとに減点の対象である。
- 11) 転向技や転向移動技での脚開きは一転向毎に減点をする (0.10、0.30、0.50)。
- 12) 旋回技において馬体に触れる (ぶつかる) 実施は毎回減点となる。(触れる0.10、ぶつかる0.50)
- 13) 旋回もしくは開脚旋回から倒立 (終末技や演技) について
旋回または開脚旋回から倒立を試みる場合、腰のまがりに対する減点はない。しかしながら、力の使用、腕のまがり、腰が下がること、不安定性についての減点はある。一方で、交差からの倒立については腰のまがりの減点は適用する。
- 14) 倒立を経過する複合技 (ブスナリ等) での停滞は減点の対象である。
わずかな停滞・・・0.10
明らかな停滞・・・0.30
2秒以上の停滞・・・0.50 (不認定)
- 15) 交差技や片脚振動での大きさ不足の減点を明確化する (採点規則11-3条)

	足先が肩の高さよりも上	足先が肩の高さと水平の間	足先が水平よりも下
振幅の度合い			
減 点	0.0	0.1	0.3

3. ニュートラル・ディダクション (ND)

- ・馬体の 3 部分を使用しない・・・0.30

■ つり輪

1. 難度認定上の確認事項

- 1) 高さ 290cm、10cm 厚の着地マットを使用すること。
- 2) すべての静止姿勢は最低2秒保持しなければならない。
- 3) 演技は、腕を垂直にまっすぐ伸ばした懸垂姿勢から開始されなければならない。腕が垂直でない場合、小欠点となる。また、その後の力技に対して技が静止した位置から開始されていないことにより、スイングを伴ったとして減点が与えられる場合もある。【FIG NewsLetter 2】
- 4) ジョナサンやヤマワキで支持が見えた場合は 0.50 の減点となり、難度不認定となる。わずかな支持の場合、0.10、0.30 の減点を伴い認定される。不認定の場合、選手の意図とは異なるため、「ホンマ支持」と「支持後ろ振り、前に回りながら懸垂」の 2 技に分割して価値を認めることはしない。
- 5) 支持後ろ振り、前に回りながら懸垂（I-7：A 難度）は、水平支持や中水平支持から実施しても認定することができる。
- 6) 振動倒立技の要求について

演技中、一つの振動倒立技（2 秒）が要求されカウントする 10 技（ジュニアでは 8 技）に入っていないなければならない。この要求を満たすことができるのは以下の 5 技だけである。

- * I-75 後方車輪倒立（2 秒） ほん転逆上がり倒立（2 秒）
- * I-81 前方車輪倒立（2 秒） 後ろ振り上がり倒立（2 秒）
- * I-86 支持後ろ振り倒立（2 秒）
- * I-87 ホンマ支持後ろ振り倒立（2 秒）
- * I-88 伸身ホンマ支持後ろ振り倒立（2 秒）

- 7) 中水平支持は、肩が握り手と同じ高さで、身体を一直線に保持しなければならない。また、腕は広げられ、上体に触れない様実施されなければならない。肩が完全に輪上部より高い位置にあった場合、水平支持と判定する。

肩の高さについて



中水平支持

肩が握り手と同じ高さ



水平支持

肩が輪上部よりも高い

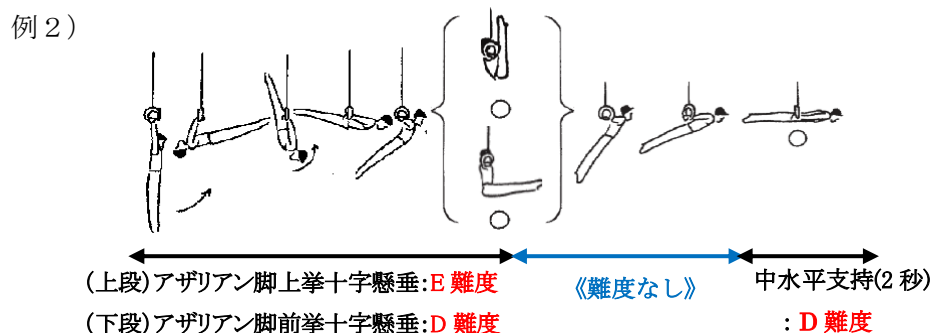
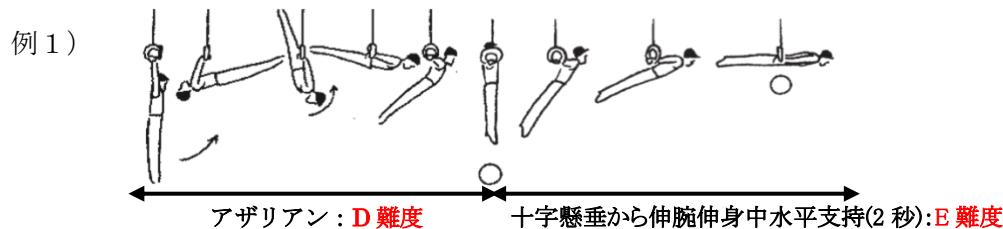
- 8) アザリアンやヤン・ミンヨン（ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり水平支持）は、伸腕かつ伸身姿勢での後転が前提であり、肘のまがりや腰のまがり実施減点となる。明らかに反動を利用した場合、グループⅢの技として判定する。
- 9) ナカヤマについては、背面水平懸垂姿勢を経過し、ゆっくり捌かなければならない。明確に背面水平懸垂まで下ろさないものは単なる十字懸垂（B 難度）と判定する。また、反動を使うような捌きは D 難度として認定しない。
- 10) 水平支持（水平支持と開脚水平支持）は各グループで一度ずつ、一演技中 2 回まで価値を認定する（EGⅡとⅢ）。その際、最も難度の高いものから順に認定する。
- 11) バランディン系の技は懸垂から引き上げる際に脚が前方に 45° を超えて屈身姿勢となつてはならず、鉛直方向の姿勢で輪を超えて肩角度が 45° 以上高くなる場合には難度が認定されない。

【FIG NewsLetter 2】



- 12) II-27 支持(水平支持)から伸腕伸身力倒立(2 秒)は、身体が鉛直面を通過してからは伸身姿勢を保持し続けなければならない。鉛直面を越えてから 45° を超えて身体をまげた場合、その技は II-26 伸腕屈身力倒立（2 秒）として判定される（9-4 条 E 審判の減点項目）。

- 13) 十字懸垂から伸腕伸身中水平支持 (2 秒) (Ⅱ-89 E 難度) は、静止した十字懸垂から実施する技であり、脚前挙十字懸垂や脚上挙十字懸垂からの実施は認められない。もし、それらの技から伸腕伸身中水平支持 (2 秒) を実施した場合は、引き上げて持ち込むことは考慮されず、単独の中水平支持に対して D 難度 (Ⅱ-10) が与えられる。【FIG/MTC 情報】



- 14) 9-2 条 9 に関して: 「いかなる理由でも難度の認められなかった力静止技からの引き上げ技は、難度が認められない。」とあるが、最終終末姿勢の部分については認定することができる。

例) け上がり十字懸垂(角度不認定)+引き上げて中水平支持(中水平支持で完璧な実施: Ⅱ-89) = この場合、中水平支持 (Ⅱ-10) は D 難度で認定することができる。

- 15) 十字懸垂 (十字懸垂、脚前挙十字懸垂、脚上挙十字懸垂) は各グループで一度ずつ、一演技中 2 回まで価値を認定する (EGⅡとⅢ)。その際、最も難度の高いものから順に認定する。

例) 「アザリアン～ナカヤマ～前振り上がり脚前挙支持～伸腕伸身力倒立」の判定は、
D+不認定 (同グループの十字懸垂) + B+不認定 (力技 4 技目)

- 16) 背面懸垂は、十字懸垂などへ引き上げる開始の姿勢としては認められず、十字懸垂 (や他の力静止技) の難度を高めることはできない。もし背面懸垂から十字懸垂に引き上げても、単独の難度 (B) を得るのみである。

- 17) すべての振動からの力静止技は、肩の位置が最終的な静止位置の高さを超えてはならない。どのような逸脱でも E 審判によって相応の減点がなされる。「ホンマ十字懸垂」で持ち込む際に 45° を超えた角度の逸脱は難度を認定しない。しかし、最終的に十字懸垂が静止している場合には B 難度は認められる。

- 18) 腕を極端にまげて (90°を超えて) 実施された振動からの静止技には 0.5 の減点が適用される。この減点はその技が不認定となることを示している。最終的な静止姿勢については、その技術的要件を満たしていれば難度が認定される。例えば、後ろ振り上がり開脚水平支持で腕を極端にまげて実施し不認定となった場合でも、最終的な開脚水平支持には A 難度が与えられる。  【FIG NewsLetter 3】

- 19) 振動から力静止技に続く技のうち逆方向に戻るものは (たとえば「前振り上がり中水平支持」「前振り上がり十字倒立」など) 二つの技とみなす。

- 20) 構成上の減点は 0.30 となる。例えば、ホンマ支持から脚前挙支持に脚をあげることや開脚前挙支持から脚前挙支持にもどすこと、け上がり支持から脚前挙支持に脚をあげること等である。(ホンマ支持から振り上げて開脚前挙支持は、構成上の減点にはならない。)

2. 種目特有の繰り返し

1) グループⅡ・Ⅲの連続について

グループⅡやⅢを連続して4回続けることはできず、D審判によって難度は認定されない。3連続の後にグループⅠのB難度以上の技が入れば改めて3連続が可能である(ただし、け上がり・後方け上がり系、およびその同一枠の技を除く)。このB難度以上の振動技はカウントされる10技内でなければならない。

例 1)	後ろ振り上がり中水平支持	Ⅲ-E		認定
	アザリアン	Ⅱ-D		認定
	後ろ振り上がり十字懸垂	Ⅲ-C		認定
	後ろ振り上がり支持	Ⅰ-A		認定
	伸腕屈身力倒立	Ⅱ-B		不認定 (EGⅡ/Ⅲ 4連続)

例 2)	後ろ振り上がり中水平支持	Ⅲ-E		認定
	アザリアン	Ⅱ-D		認定
	後ろ振り上がり十字懸垂	Ⅲ-C		認定
	後ろ振り上がり開脚前挙支持	Ⅰ-B		認定
	伸腕屈身力倒立	Ⅱ-B		認定 (※)

※「後ろ振り上がり開脚前挙支持」がカウントされる10技に含まれる必要がある。

例 3)	後ろ振り上がり中水平支持	Ⅲ-E		認定
	け上がり脚前挙支持	Ⅲ-B		認定
	十字懸垂 (静止なし)	Ⅱ-B		不認定
	伸腕屈身力倒立	Ⅱ-B		不認定 (EGⅡ/Ⅲ 4連続)

※「実施された」グループⅡ・Ⅲの技は全て、カウントする技に入っていなくても、この規則に関与する。不完全な実施や繰り返しにより不認定になった場合も含まれる。

2) 終末姿勢が同一の力静止技について

Dスコアの算出にあたり同一番号技の繰り返しは認められないが、つり輪の場合この規則は拡大解釈される。それは、終末姿勢が同一の力静止技は各グループで1技だけ、最大2技の難度が認められるというものである(一方はグループⅡで他方はグループⅢ)。もしも、同一グループかつ終末姿勢が同一の力技を複数実施した場合は、最も難度の高い技のみが認定される。

注) 十字懸垂・脚前挙十字懸垂、脚上挙十字懸垂は全て同一の終末姿勢とし、開脚水平支持・閉脚水平支持においても同一の終末姿勢としてあつかう。

例1)	後ろ振り上がり十字懸垂 (Ⅲ-C)	～	ホンマ十字懸垂 (Ⅲ-D)
	不認定		認定
例2)	アザリアン (Ⅱ-D)	～	ホンマ十字懸垂 (Ⅲ-D)
	認定		認定
例3)	け上がり十字懸垂 (Ⅲ-C)	～	ホンマ脚上挙十字懸垂 (Ⅲ-E)
	不認定		認定

3) グチョギー系の技は最大2回まで認められる。例えば、グチョギーをかかえ込み、屈身、伸身姿勢で3回実施した場合、難度の高い2技のみが認定される。(特別な繰り返し)

3. 演技実施上の確認事項

- 1) 力静止技において、2 秒未満の静止は減点 (0.30)、静止無しは減点 (0.50)。
- 2) 後方車輪（ほん転逆上がり）倒立経過において、腕が完全に揃っていない捌きや、倒立位を経過していない場合の減点 (0.10、0.30)。
- 3) ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさが無い場合の減点 (0.10、0.30)。
- 4) ヤマワキやジョナサンの回転途中に支持が見られた場合（止まりかけて前ロールをするような捌き）の減点 (0.50)。
- 5) 振動や引き上げからの力技において、最終姿勢よりも肩や体の位置が上がってはならない。最終姿勢からの逸脱が 45° を超える場合は、その価値が認められず、0.50 の減点となる。その後、最終的な静止姿勢がみられた場合はその技は認められる。
 - 例 1：肩角度が 45° を超える高さから持ち込まれたホンマ十字懸垂は、0.50 減点され、静止時間が満たされていれば十字懸垂の B 難度が与えられる。
 - 例 2：肩角度が 45° を超えた十字懸垂から中水平に引き上げられた場合は、0.50 減点され、静止時間が満たされている場合は中水平支持の D 難度が与えられる。
- 6) 演技開始時や十字懸垂、中水平支持などの後に腕をまげて逆懸垂になる捌きは減点 (0.10、0.30、0.50)。
- 7) 力静止技や静止技に持ち込む際の肘のまがりの減点 (0.10、0.30、0.50)。
 - 例：振動からの中水平やけ上がり十字懸垂の際の肘のまげ伸ばしを利用した持ち込み方など。
- 8) 力静止技での深すぎる握りは許されない。深すぎる握りとは力技の際、負担を軽減するために手首を巻き付ける実施のことであり、毎回 0.10 の減点となる。正しい握りとは、手指が輪を握るかどうかでなく、手首がまっすぐな捌きである。※輪の（手首がまっすぐで手を開いた）握り方は評価の対象ではない（誤った握りではない）。
- 9) 倒立位で腕がケーブルに触れる、肘や腰を使って調整などの減点 (0.10、0.30)。
- 10) 技術的に最低限前腕部がケーブルに触れることが必要となる、屈腕による力倒立技に対してのみ、ケーブルに触れたことに対して減点しない（Ⅱ・25：屈腕屈身（開脚）力倒立（2 秒））。
- 11) 難度表にない技（逆懸垂、屈身逆懸垂、背面懸垂姿勢）の 2 秒以上の停滞の減点（毎回 0.10）
- 12) 輪（ケーブル）の揺れやゆがみは、1 技毎に 0.10 の減点となる。
- 13) 十字倒立で、頭頂部が輪よりも高い位置での実施の減点 (0.50)。
- 14) 十字倒立で反った姿勢に対する減点 (0.10)。
- 15) 中水平支持や（開脚）水平支持で、肩が静止していても足先が下がる実施や、全体的に小刻みに揺れているような実施では静止とは認められず、静止がみられない減点 (0.50) に抵触する。
- 16) 中水平支持において腕が体に触れたり支えたりする (0.10、0.30)。
- 17) 屈腕伸身力倒立で振動を使った場合の減点 (0.10、0.30)。
- 18) 伸腕屈身力倒立で肘がまがった場合、肘まがり減点 (0.10、0.30)とケーブルに触れる減点(0.30)。
- 19) 脚上挙支持や脚上挙十字懸垂は、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性にかかる減点の対象となる (0.10、0.30)。また、脚上挙支持の脚は垂直でなければならない（脚上挙十字懸垂は、腕が水平で脚が垂直）。
- 20) 演技開始の懸垂で正しい姿勢からの逸脱（肩転位や輪を開いた状態）が見られる場合は、減点の対象とする。

- 21) 押し上げ技や引き上げ技で姿勢の変化に乏しい実施は実施減点の対象となり、不認定となる可能性もある（中水平支持～水平支持）。また、角度が高い力静止技から続けられた引き上げ技では、最大 0.30 の減点がこの過失に適用される。
- 22) け上がり系の技は、深く腰をまげた姿勢から開始され、明確に大きな振動を伴って実施される振動系の技である。Ⅲ-59 後方け上がり中水平支持（2 秒）のようなけ上がり系の技で、最小限しか腰をまげない捌きや、振動よりも力を使った場合は、小・中・大欠点となる。（9-4 条 E 審判の減点項目）

4. ニュートラル・ディダクション (ND)

- ・ 振動倒立技がない・・・0.30

■ 跳 馬

1. 難度および演技実施上の確認事項

- 1) 種目別予選および決勝において、得点の算出方法は第 1 跳越と第 2 跳越の平均を得点とする。
- 2) 高さ不足（上昇局面のみられない実施）は以下の基準とする。
 - 減点なし = 群を抜く卓越した高さ
 - 小 欠 点 = 浮いたと感じる程度
 - 中 欠 点 = 浮きがみられない
 - 大 欠 点 = 低いと感じる
- 3) 全ての跳越技において、準備局面がみられない着地は減点となる（0.10、0.30）。
- 4) 着地の際の姿勢で、頭や腰の位置が低い姿勢は減点の対象である。
低い着地姿勢とは、腰が膝より下にあると定義され、技術欠点として 0.50 の減点となる。（9-4 条
その他の技術欠点） **【FIG NewsLetter 2】**
- 5) 着地一步の踏み出しで、一足長以上は中欠点である。
- 6) 軸ぶれやひねり不足による横方向への一步は、さらなる減点の可能性はある。
- 7) ひねり不足が 90° を超えた場合、一段階下の技の価値を与える。
- 8) 着地が止まっても脚が開いたままやずれている場合は減点の対象である。
- 9) 着地後に、マットを越えて前に飛び出した場合、ライン減点は適用されない。マットの先へ到達するよりも前に、着地エリアからラインを踏み越えたり飛び出したりした場合には、通常のライン減点が適用される。
- 10) 第一局面でロンダートから 1/2 ひねりを加えて着手する技を実施する場合、着手時においてひねり不足に対する減点はある。「ひねり不足」の減点項目が該当し、正しい位置から 90° を超えて不足するような極端な実施の場合、その実施はユルチェンコ系の技として認定される。
- 11) 競技直前の 30 秒練習では、選手は最大 2 本のウォーミングアップ跳越が認められる。仮に 30 秒のウォーミングアップ時間が過ぎていたとしても、2 本跳越の権利を有する。これはすべての競技区分において適用される。ウォーミングアップ跳越の管理は線審が務めることとする。
ウォームアップ中、選手は 2 本までの跳越しか実施できない。跳馬の上に立ち、ジャンプや宙返りを行って着地をする場合も、1 本のウォームアップとして数える。
例えば、選手が助走からの跳越を 2 本行い、その後に跳馬の上にもう一度上がり、宙返りまたは跳び下りて着地をとった場合、3 本目のウォームアップとみなされ、採点規則に従って 0.3 の減点となる。 **【FIG NewsLetter 1】**
※競技会により特例を認める場合は、主催団体の判断のもと対応すること（国内対応）。

2. 0点となる実施について (D・E 両審判 0.00)

- 1) 跳馬に着手することなく跳び越えた場合、または跳馬に触れても突き手が見られない場合。
- 2) ロンダート技において、セフティ・カラーを使用しなかった場合。
- 3) 技として判定できないような場合、あるいは跳馬を足で蹴った場合。
- 4) 跳越において補助行為があった場合。
- 5) 最初に足による着地が行われなかった場合。これは、体のどの部分よりも先に少なくとも片足が着地マットに触れなければならないことを意味している。
- 6) 故意に横向きで着地した場合。
- 7) 禁止されている技を実施した場合（開脚技、第1局面での宙返り、踏切前の禁止された技等）。
- 8) 種目別予選および決勝において、1本目と同じ技を2本目も行った場合。

3. ニュートラルディダクション (ND)

- 1) ライン減点
- 2) やり直された助走に対する減点
 - ・助走をやり直した場合 ⇒ 1.00 (失敗の助走が跳躍板や器械に触れなかった場合に限る)
 - － 1跳越を行う場合、1回のやり直しが認められる。
(3回目の助走は認められない)
 - － 2跳越を行う場合、1回のやり直しが認められる。
(4回目の助走は認められない)
- 3) 同じグループからの跳越に対する減点
 - ・種目別予選または決勝で同じ技を繰り返す ⇒ D・E 両審判 0.00
 - ・種目別予選または決勝で2本目の跳越を同じグループから実施する
⇒ 2本目の跳越技の決定点から 2.00
- 4) 25mを超えた助走 ⇒ 0.50
- 5) 競技直前練習で2本を超えて跳越をする ⇒ 1本目の跳越から 0.30

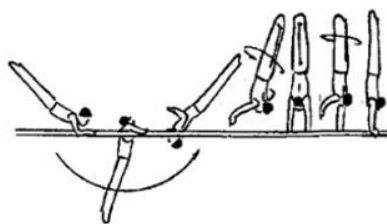
■ 平行棒

1. 難度認定上の確認事項

- 1) 倒立または単棒縦向き倒立から始めるヒリーは 360° のひねりが必要であり、単棒横向き倒立から $3/4$ ひねりの技は B 難度 (I-50) とみなす。
- 2) マクーツ系の技の単棒倒立部分での停滞や停止に対する評価
 - 1 秒未満の停滞 (D 審判：認定 E 審判：-0.10)
 - 2 秒未満の停滞 (D 審判：認定 E 審判：-0.30)
 - 2 秒以上の停止 (D 審判：不認定 E 審判：-0.50)
- 3) ヒリー系の技につなげた場合に難度が上がる技
 - ・後方棒上宙返り単棒縦向き倒立 C 難度 → D 難度
 - ・棒下宙返り単棒縦向き倒立 (シャルロ) D 難度 → E 難度
 - ・後方車輪単棒縦向き倒立 (ピアスキー) C 難度 → D 難度
 - ・車輪ディアミドフ単棒縦向き倒立 E 難度 → F 難度

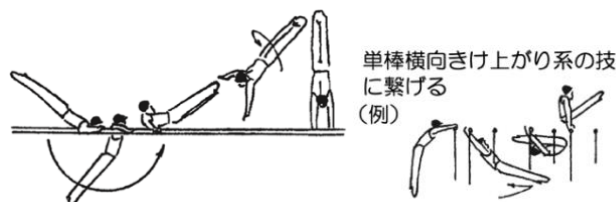
※あとに続けたヒリー系の技も難度が一つ格上げとなる。
 ※あとに続けたヒリー系の技が不認定になった場合は格上げしない。
 ※開脚になる技 (ティップルトやアリカン等) は、単棒倒立になっても難度は上がらない。
- 4) ヒリー、マクーツ系および前方宙返り支持系の技において、キャッチ (手が入る) の際に肘が大きく (90° を超えて) まがった場合、難度は認められない。
- 5) 前振り上がり $1/4$ ひねり単棒倒立は、単棒横向き倒立から $1/4$ ひねって中に入り倒立になった場合は、「ほん転 $1/4$ ひねり単棒横向き倒立経過 $1/4$ ひねり倒立 (C 難度)」であり、単棒横向き倒立から単棒横向きけ上がり系の技に繋がった場合は、「前振り上がり $1/4$ ひねり単棒倒立 (F 難度)」と判定される。

ほん転 $1/4$ ひねり単棒横向き倒立経過 $1/4$ ひねり倒立 (コフトゥン) : C 難度 (II-15)



前振り上がり $1/4$ ひねり単棒倒立 : F 難度 (II-6)

*単棒横向きけ上がり系の技に繋げる



- 6) 棒下宙返り倒立で肘がまがっても上昇運動に停滞がなければ難度を認定する。しかし、上昇中に停滞する実施や肩が一度下がるような実施は難度不認定となる。
- 7) 棒下宙返りひねり倒立で倒立の角度が低い実施 (45° 未満) をした場合、明らかな過失として難度不認定とし、棒下振り出しひねり支持 (C 難度) としては判定しない。棒下振り出しひねり支持を実施する場合は、意図を明確に表現しなければならない。
- 8) 開脚抜き倒立技 (ティップルト等) で脚がバーにのった場合、難度不認定となる (器械上への落下)。また、開脚支持で明らかに停止する実施や上昇時に足先が一端下がり再び上げた場合も難度不認定となる。
- 9) 懸垂前振り上がり開脚抜き伸身かつ水平位で懸垂 : (バブサー : E 難度) の後に連続された技は独立した難度を有する。(後方車輪倒立 (C)、モイ (C)、バーレ (D) など)

- 10) 屈身ベレーは、最初の後方宙返りから明確な屈身姿勢を示さなければならない。懸垂から宙返りになる際に膝のまがるものや屈身の不明確な実施（屈身になるのが遅い）は、かかえ込みと判定する。
- 11) 前方 2 回宙返りひねり下りは、技の前半または後半のどちらでひねりを加えてもよい。
- 12) 特別な繰り返し
- ① 同じグループ内で、姿勢の異なる同じ種類の宙返り技を行うことはできない。
- 例) ・かかえ込みモリスエ (I-46) と屈身モリスエ (ファン・リーピン) (I-47)
- ・かかえ込みベレー (III-58) と屈身ベレー (III-59)
- ・前方宙返り開脚抜き腕支持 (I-100)、屈腕支持 (I-101)、懸垂 (I-95)
- ・ギャニオン (III-123) とギャニオン 2 (III-124)
- ・懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持 (マツナガ) (III-64)、懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり懸垂 (III-65)、トレス (III-71)、フォーキン (III-77)
- ・パクニック (II-53) とパクニック 2 (II-54)
- ② 最大 2 回までの後方車輪倒立技 (III-21、22、29、30、42、46、48)
- ・後方 (背面) 車輪 (単棒) 倒立 (III-21)、ピアスキー (III-22)、車輪ディアミドフ (単棒倒立) (III-29)、車輪ディアミドフ (1/4) ひねり (III-30)、車輪ディアミドフ単棒倒立*ヒーリーに繋がった場合 (III-42)、ダウザー (III-46)、バウマン (III-48)
- ③ 最大 2 回までの棒下宙返り (逆上がり) 倒立技 (III-106、107、108、114、119、120、130、131、137)
- ・棒下宙返り (単棒) (1/4 ひねり) 倒立 (III-106)、棒下宙返り (3/4) ひねり倒立 (III-107)、棒下宙返り 1 回ひねり倒立 (III-108)、棒下宙返り 5/4 ひねり倒立 (III-114)、シャルロ (III-119)、ヤマムロ (III-120)、横向き逆上がり 1/4 ひねり倒立 (III-130)、横向き逆上がり (3/4) ひねり倒立 (III-131)、マローン (III-137)
- ※いずれも難度の高い順にカウントする。

2. 演技実施上の確認事項

- 1) 振動から倒立位を経過する技は、15°未満の角度逸脱であっても減点 (0.10) となる。
- 2) **ディアミドフなどの倒立で完了する技は、次に続く長懸垂技や前振り上がり支持に持ち込む前に明確な倒立姿勢を示さなければならない。明確な倒立姿勢が見られない場合、その技は不認定となる可能性がある。**  **【FIG News Letter 3】**
- 3) 静止技として難度が認定されるためには 2 秒保持しなくてはならない。
- 例 1) 伸腕屈身力倒立で静止が 2 秒未満の場合の減点 (0.30)。
- 例 2) 伸腕屈身力倒立で静止がない場合の減点 (0.50 : 難度不認定)。
- 4) 支持から前方腕支持ローリングをした場合の減点 (0.30)。
- 5) すべてのけ上がりにつながる懸垂技は、伸膝で行わなければならない。膝をまげた懸垂姿勢の減点 (0.30)。
- 6) 宙返り技の受ける際の体の開きは、バーの高さで水平位を基準とする。モリスエやベレーは浮きの表現とともに、腕支持になる前に身体や膝をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分なものや、膝をまげたまま腕支持になるものは実施減点の対象となる。回転の途中でぶつかるよう

- に腕支持になる減点 (0.30、0.50)。かかえ込んだまま腕支持になった場合の減点 (0.30)。モリスエやバーレの高さ不足の減点 (0.10、0.30)。モリスエやバーレでバーを持った瞬間の姿勢不良の減点 (0.10、0.30)。
- 7) モイや後方車輪系の技は、振り下ろす際、体が水平位に達するまで膝をまげてはならない。
 - ・ バーの高さで膝をまげはじめる (減点なし)
 - ・ 振り下ろしてから膝をまげはじめる (0.10)
 - ・ 倒立位から膝をまげはじめる (0.30)
 - 8) バーレ、モイ、車輪系の技で足先がマットに触れた減点 (0.10)、明らかにぶつかった減点 (0.50)。
 - 9) バーレや宙返り系の技の終末局面において、バーを正確に握らない、または遅い握り、上腕部のみで支持しながら前振りになるような捌きに対する減点 (0.30)。
 - 10) バブサーで水平位からの逸脱、支持が見えすぎる場合の減点 (0.10、0.30)、身体が水平から 45° を超えて逸脱するか、肩角度が 90° を超えてバーを握った場合の減点 (0.50、不認定)。
 - 11) 棒下宙返り倒立系の技は伸腕での実施が前提である。肘がわずかにゆるむものは実施減点となる。肘がまがった場合の減点 (0.10、0.30)。肘が深くまがった場合の減点 (0.50)。
 - 12) シャルロやピアスキーで縦向き単棒支持で正対を示さない場合、縦向きの角度逸脱減点もありうる (0.10、0.30)。握り手を前後にずらしたことによるわずかなゆがみは減点の対象とはならない。身体の向きの逸脱は減点の対象となる。過度の逸脱は難度不認定となる。
 - 13) 単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立で、足先がバーに触れた、ぶつけた場合の減点 (0.10、0.50)。
 - 14) ティップペルトで脚がバーにのった場合、器械上への落下となり減点 (1.00)。
 - 15) ティップペルトは振動技であるため、継続的な動きで実施する必要がある。倒立へ上げる際、脚が下がったり、明らかな力の使用をしたりせず上昇しなければならない。脚の下がり、停滞、または明らかな力の使用は、減点または難度不認定となる。
 - 16) 終末技で着地を止めても着地前に身体を伸ばす局面がみられない減点 (0.10)。着地で膝をついた実施(1.00)、膝がマットに触れた場合 (0.30)。
 - 17) 前振り上がりは、背中がバーに対して水平になる必要がある。 45° までの逸脱は 0.10、 45° を超える逸脱は 0.30 の減点となる。
 - 18) 前振り上がりから直接、脚前拳支持につなげる捌きは、前振り上がりの大きさ不足による減点 (0.10、0.30) となる。

3. ニュートラルディダクション (ND)

- ・ ウォーミングアップ時間は、個人に対し 50 秒、チームに対し 50 秒×人数分が与えられる。それらにはバーの調整やマグネシウムをぬる時間も含まれる (終了のコールと同時に始めた運動は認められる)。時間オーバーした場合は決定点から 0.30 の減点 (ND) となる。
- 計時審判のコールはアップ開始の「スタート」、個人の場合はカウントアップ「40 秒」、「50 秒 (終了)」とする。チームの場合はカウントダウン「30 秒前」、「10 秒前」、「終了」とする。運営上可能であればタイマーを設置する。

■ 鉄 棒

1. 難度認定上の確認事項

1) 組合せ加点

- ・ 組合せ加点は下記のような組み合わせに与えられる（すべて逆も可）。

手放し技		手放し技		加点
C 難度	+	C 難度以上	=	0.10
D 難度以上	+	D 難度以上	=	0.20

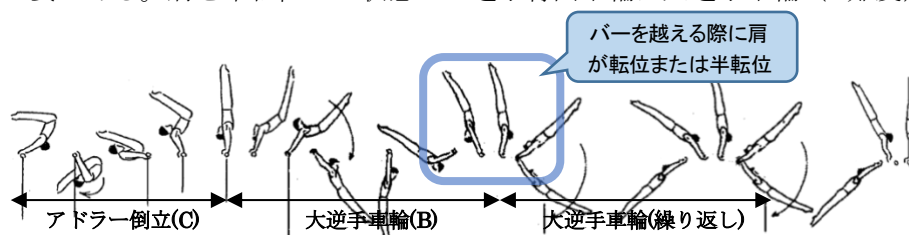
アドラー系の技		手放し技		加点
D 難度以上	+	D 難度	=	0.10
D 難度以上	+	E 難度以上	=	0.20

- ・ 大欠点のある場合は組合せ加点が認められない。
- ・ どちらの技もカウントされる10技の中に含まれていなければならない。

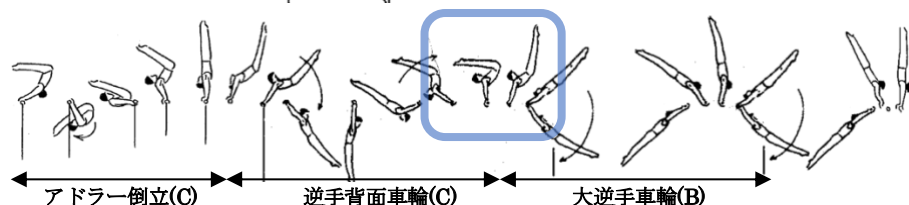
2) 特別な繰り返し

- ・ アドラー系の技は、演技中に最大2回まで実施することができる。この場合難度の高い順に認められる。
 - ・ ひねりを伴う技は握り方の違う同じ技（例：リバルコと後方とび車輪3/2ひねり片大逆手）を行うことはできない。行った場合は、難度の高い順に認められる。
 - ・ トカチェフ系（ピアッティ系を含む）およびコバチ系の技は演技中に最大2回まで実施することができる。ただし、それらの手放し技は他の手放し技と直接連続した場合に限り3回目の実施が認められる。
- 3) 手放し技で落下した際、落下前に明確な懸垂局面が示された場合は難度が認定される。片手が離れた、または片手で持った場合は、最終的に両手で持った時点か、他の技が明確に開始された場合に難度が与えられる。
- 4) とびひねり技でとびが見られない握り換えは難度を分割する。
- 5) 逆手背面車輪(C難度)が認定されるためには、下降局面からバーを越えるまでの全経過で肩が未転位である必要がある。肩を半転位した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪（B難度）と判定する。

例 1)



例 2)



- 6) 大逆手車輪（B 難度）は、以下のようにバーを越えることで難度を認定することができる。
- 例) アドラー（C）～大逆手振り上がり（大逆手車輪：B）～大逆手エンドー（C）
 リバルコ（D）～大逆手振り上がり（大逆手車輪：B）～大逆手エンドー（C）
- 7) 以下のように、バーを越える前に持ち換えた場合は、大逆手車輪（B 難度）は認定されない。
- 例) アドラー（C）～大逆手振り上がり逆手持ち換え（難度なし）
 リバルコ（D）～大逆手振り上がり逆手持ち換え（難度なし）

- 8) 大逆手エンドー(Ⅲ-99)の難度の認定を得るためには、大逆手倒立で開始し、大逆手でバーの真上を越える必要がある。大逆手でバーの真上を越えない場合、難度は認められない。



- 9) 伸身で行う技は全経過伸身姿勢を示さなければならず、経過中に屈身やかかえ込み姿勢がみられた場合、低い難度で判定する。後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下りにおいて、後半に膝をまげるような実施は、かかえ込みと判定し D 難度とする。
- 10) 伸身トカチェフは、バーを持つまで全経過伸身姿勢を示さなければならない。伸身と認定するためには、足先がバーの真上を通過する際に体が一直線でなければならない。バーを越える前に 45° を超えて腰をまげた場合、屈身トカチェフ(C)として判定される。バーを越えたのちに腰のまがりがあった場合は D 難度として認定するが、相応の減点がある。さらに明確化すると、これは、足先がバーの上を通過する時に身体がまっすぐでなければならないことを示している。



【FIG NewsLetter 2】

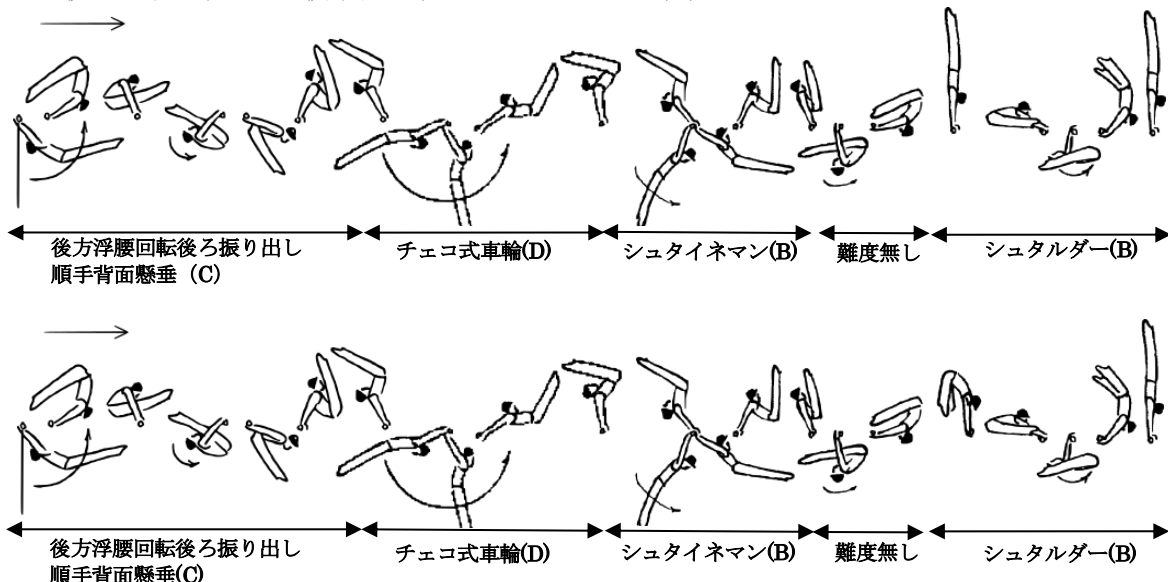
- 11) ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断する。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン (B 難度) と判定する。
- 12) 前方浮腰回転開脚抜き懸垂 (支持) (Ⅲ-103) は車輪からでも、懸垂前振りからでも良い。
- 13) ツォ・リミンでひねりが不十分な場合 (最初のひねりで 90° を超える逸脱)、D 審判によって難度は認められず、E 審判によって 0.50 の減点を受けることになる。その際は、前方片手車輪 (B 難度) としても認められない。
- 14) ひねって片手大逆手になる技は、片大逆手で実施したのと同様・難度である。
- 15) クーストは明確なとびと滑らかなひねりで実施する。明確なとびがない場合不認定となる。
- 16) 順手背面での連続技を実施する際、後方浮腰回転支持からただちにシュタルダーへ繋げた場合には、後方浮腰回転支持における角度や身体の開きに関係なく (倒立姿勢に上げた場合も含む)、常にシュタイネマン (B) ~シュタルダー (B) として判定する。シュタルダーに繋がなかった場合にはケステ (C) として判定され、角度逸脱の減点や不認定の対象となる。



【FIG NewsLetter 3】

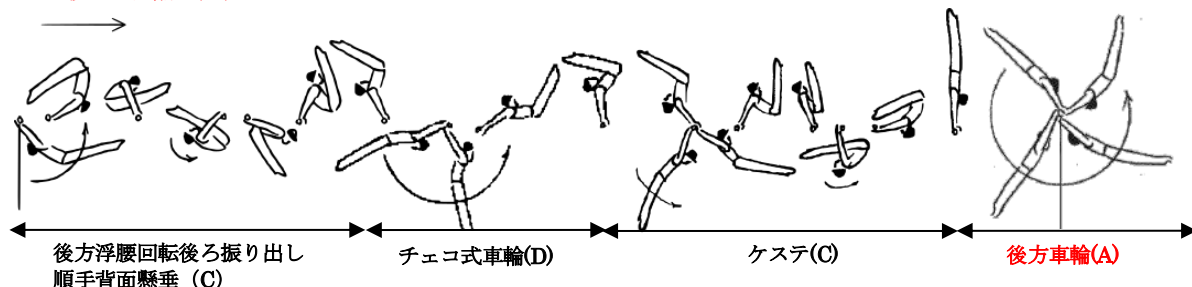
順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転支持の終末局面について、想定される複数の捌きの判定について詳細を以下の通りとする。

- ① 後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂 (C) ~ チェコ式車輪 (D) ~ シュタイネマン (B) ~ 後方浮腰回転支持 (難度無し) ~ シュタルダー (B)



※後方浮腰回転支持の終末局面が倒立に収める収めないに関わらずシュタルダーへ繋げた場合は、常にシュタイネマン(B)～シュタルダー(B)として判定する。

② 後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂 (C) ～チェコ式車輪 (D) ～ケステ (C) ～後方車輪 (A)

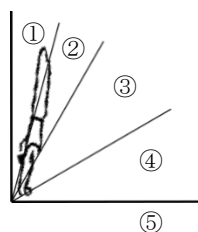


2. 演技実施上の確認事項

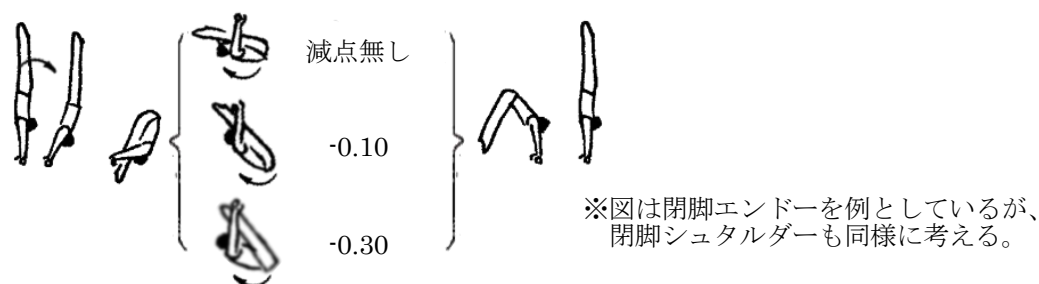
- 1) 余分な握り換えは、「余分または中間的な支持」と見なされ実施減点となる (0.10)。  **【FIG NewsLetter 2】**
 例1：ツォ・リミンやアドラー1回ひねり倒立において、片逆手倒立で完了し、ただちに逆手に握り換えた場合、0.10の減点となる。
 例2：順手で実施されるエンドー、け上がり系、後ろ振り上がり技から、2回の握り換えで逆手になった場合、2回目の握り換えに対して0.10の減点となる。
 注) 片逆手の技（前方車輪、エンドー、後ろ振り上がり、け上がりなど）から1回の握り換えで逆手になった場合、減点とはならない。
- 2) 車輪での単純な横への手のずらし（片手も含め）は実施減点となる (0.10)。一連の動作であっても、片手ずつずらした場合には0.10+0.10の減点となる。
- 3) 演技開始の振り出しは、最大3回のスイングが認められる。3回を超えたスイングは0.30の減点を伴う。前や後ろへのいかなる動きもスイングとして数える。さらに、とびついでのスイングや、コーチが選手を押して振動を与える場合もスイングとして数える。  **【FIG NewsLetter 2】**
- 4) 演技開始時に、後ろ振り上がり支持から後方浮支持回転(やその他の技)を実施した場合、単純な方向変換として構成上の欠点 0.3 となり得る(15-2 条-1-2 d)。後方への振り出しで支持が見られない場合、減点対象とならない。  **【FIG NewsLetter 3】**
- 5) ひねりを伴う技はひねり終わってバーを持った時の角度で判断をする。
- 6) 手放し技では、バーを握る前に身体をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点となる。
- 7) ヤマワキは、伸身で身体が垂直にバーを越えなければならない。バーを越える際の過度の腰のまがりや不完全な実施は減点の対象となる。
- 8) 宙返りを伴いバーを越える手放し技はバーを越えて車輪技に続けなければならない。続かなかった場合は 0.30 の減点となる。他の手放し技に続けた場合は対象外である。
- 9) 倒立へ上げる途中での脚の下がり、減点の対象となる (9-3条2.d)。

15° まで………	0.10
16° ～30°………	0.30
31° ～45° ……	0.50
45° を超える…	0.50 (不認定)
- 10) 無価値な振れ戻り (0.30)
 - ・ け上がり倒立や後ろ振り上がり倒立ー後方車輪、後方浮支持回転倒立、シュタルダー等
 - ・ 懸垂後ろ振りーとび順手持ち換え前振り

- 11) 全ての倒立になる、または経過する技の角度逸脱は、下記に従って減点する。

	①	0° ~15°	減点なし
	②	16° ~30°	減点0.10
	③	31° ~60°	減点0.30
	④	61° ~90°	減点0.50
	⑤	90° を超える	減点0.50 難度不認定

- 12) エンドー、シュタルダー、ワイラー、アドラー系の技が認定されるには、意図した方向にバーを越えて続けなければならない。続けられなかった場合は減点の対象となる (0.30)。
- 13) 閉脚エンドーおよび閉脚シュタルダーにおいて、バーの下を通過する際に、両腕の間に膝程度まで脚が深く入っていないなければならない。肩角度が広く、下腿部若しくは足首程度までしか脚が入っていない場合は減点の対象となる (0.10、0.30)。【FIG/MTC 情報】



- 14) エンドー、シュタルダー、ワイラーの開始局面で、倒立位からの逸脱は減点対象となる (0.30)。一方、アドラー系の技については開始局面で倒立位から行う必要はない。
- 15) 順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立（ケステ）の最終局面で足を抜いたのち、即座にシュタルダーに持ち込む場合、倒立に収めなくても減点にはならない。ただし、技の捌き次第では技術欠点、姿勢欠点は相応に減点される。
- 16) 演技中のプロテクターの破損について、プロテクターがはっきりと切れ、落下や中断につながった場合、選手は減点なしで演技全体をやり直すことができる。その際は審判長の許可を得て演技はローテーションの最後に行う。元々最終演技者であった場合は審判長の裁量で許された時間の後に演技を行う。選手が演技やり直しの許可を得るためには、ただちに破損したプロテクターを D1 審判に見せなければならない。

5. タイ・ブレイクについて

下記は FIG 競技規則 Technical Regulations 2024 を抜粋した内容である。競技会における同点の扱いについては競技会ごとの申し合わせ事項であり、参考としてこの一部または全部を準用・適用するのも主催団体の裁量であるので、必ず競技会前に確認しておく事が望ましい。

第 2 章 体操競技に関する特別規定

第 7 条 タイ・ブレイク ルール

第 7 条 7.1 予選

すべての決勝への資格取得：

どの順位においても同点の場合、以下の基準で予選順位を決定させる：

第 7 条 7.1.1 団体決勝のための予選

団体決勝の予選のどの順位においても同点の場合、予選順位は以下の基準で決定される：

最終得点のうち、男子は各種目のチーム得点の高い 5 種目の合計、女子はチーム得点の高い 3 種目の合計の得点が高いチームが上位となる。(それでも同点の場合は、男子は得点の高い 4 種目、3 種目、2 種目、1 種目の合計、女子は得点の高い 2 種目、1 種目の合計の得点)

それでも同点の場合は、どちらのチームも同じ順位とする。同点のチーム間で抽選を行い、団体決勝のスタート順を決定する。

第 7 条 7.1.2 個人総合決勝のための予選

個人総合決勝の予選のどの順位においても同点の場合、予選順位は以下の基準で決定される：

1. 最終得点のうち、男子は得点の高い 5 種目の合計、女子は得点の高い 3 種目の合計の得点が高い選手が上位となる。(それでも同点の場合は、男子は得点の高い 4 種目、3 種目、2 種目、1 種目の合計、女子は得点の高い 2 種目、1 種目の合計の得点)
2. さらに同点の場合は、すべての種目の E スコアの合計が高い選手が上位となる。
3. さらに同点の場合は、すべての種目の D スコアの合計が高い選手が上位となる。

それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。同点の選手間で抽選を行い、個人総合決勝のスタート順を決定する。

第 7 条 7.1.3 種目別決勝のための予選

跳馬を除いた種目のどの順位においても同点の場合、予選順位は以下の基準で決定される：

1. E スコアが高い選手が上位となる。
2. さらに同点の場合 D スコアが高い選手が上位となる。

それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。同点の選手間で抽選を行い、種目別決勝のスタート順を決定する。

跳馬の予選でどの順位においても同点の場合、予選順位は以下の基準で決定される：

1. 2 回の実施の得点のうち、最も高い得点をもつ選手が上位となる。
2. さらに同点の場合 2 回の実施のうち、どちらか一方の E スコアが高い選手が上位となる。

3. さらに2回の実施のうち、どちらか一方のDスコアが高い選手が上位となる。
それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。同点の選手間で抽選を行い、種目別決勝のスタート順を決定する。

第7条 7.2 決勝

第7条 7.2.1 団体決勝

団体決勝のどの順位においても同点の場合、最終順位は以下の基準で決定される：

最終得点のうち、男子は各種目のチーム得点の高い5種目の合計、女子はチーム得点の高い3種目の合計の得点が高いチームが上位となる。(それでも同点の場合は、男子は得点の高い4種目、3種目、2種目、1種目の合計、女子は得点の高い2種目、1種目の合計の得点)

それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

第7条 7.2.2 個人総合決勝

個人総合決勝のどの順位においても同点の場合、最終順位は以下の基準で決定される：

1. 最終得点のうち、男子は得点の高い5種目の合計、女子は得点の高い3種目の合計の得点が高い選手が上位となる。(それでも同点の場合は、男子は得点の高い4種目、3種目、2種目、1種目の合計、女子は得点の高い2種目、1種目の合計の得点)
 2. さらに同点の場合は、すべての種目のEスコアの合計が高い選手が上位となる。
 3. さらに同点の場合は、すべての種目のDスコアの合計が高い選手が上位となる。
- それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

第7条 7.2.3 種目別決勝

跳馬を除いた種目別決勝でどの順位においても同点の場合、最終順位は以下の基準で決定される：

1. Eスコアが高い選手が上位となる。
 2. さらに同点の場合Dスコアが高い選手が上位となる。
- それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

跳馬 種目別決勝

跳馬の決勝でどの順位においても同点の場合、最終順位は以下の基準で決定される：

1. 2回の実施の得点のうち、最も高い得点をもつ選手が上位となる。
 2. さらに同点の場合2回の実施のうち、どちらか一方のEスコアが高い選手が上位となる。
 3. さらに同点の場合2回の実施のうち、どちらか一方のDスコアが高い選手が上位となる。
- それでも同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

6. 2024 年度国内内規

1. 次の項目は以下に示す競技会以外の大会で適用する。
 - ・ 第 78 回全日本体操競技選手権大会（個人総合選手権、種目別選手権、団体選手権）
 - ・ 第 63 回 NHK 杯体操
 - ・ 2024 全日本ジュニア体操競技選手権大会（1 部）
 - ・ 第 78 回全日本学生体操競技選手権大会
 - ・ 第 57 回全日本シニア体操競技選手権大会（シニアの部）
 - ① 終末技グループの要求難度について
 - ・ A 難度の終末技 …… +0.10
 - ・ B 難度の終末技 …… +0.20
 - ② 下記の宙返り下りは A 難度とする
 - ・ つり輪、平行棒、鉄棒の前方・後方のかかえ込み宙返り下り
2. ケガや出血等での対処

競技中に落下等の原因によりケガや出血等が見られた場合、状況により審判長、医師らの判断により演技の中止を決定する場合がある。
3. オーダーミスの減点は、発覚した最初の選手の決定点から ND（0.30：国内対応）とする。
4. 服装に関する国内対応

団体総合予選及び決勝においてチームの服装およびチームを示すワッペンと同じデザイン、同色とする。チームを示すワッペンはウエストラインより上とし、身体前面の同一部位に統一し装着することとする。

これらの違反が生じた場合、発覚した最初の種目において、抵触した選手より ND（0.30：国内対応）とする。

※ 以下はこの規則に抵触しない。

 - ・ メーカーのロゴの位置、デザインの違い等
 - ・ チームを示すワッペン以外に、個々の選手に対するスポンサー等のロゴの装着すること（参加する競技会主催団体の規則を優先する）。
5. ジュニアルール（U-12、U-15）
 - 1) 次の項目を追加する

追加箇所	2022 年版全国ブロック選抜 U-12 適用規則 第 4 条 1. (5) 2022 年版中学校男子適用規則（U-15） 第 4 条 1. (5) 「短い演技（技数不足）に対する ND について」
追加内容	※終末技において、不認定となった場合でも一つの技としてカウントする。 ただし、グループ点は与えられない。
 - 2) 一般規則におけるつり輪のグループⅡ・Ⅲの連続を制限する規則は適用しない。
6. 小学生規定演技
 - ・ ゆかの演技スタートを決められた位置から開始しない場合、ND 0.30 の減点とする。

7. マナー・モラルについて

採点規則に記載されていない競技会における演技中や演技の前後、競技場内での行動や振る舞いについて、以下の内容を守っていただきますようお願い申し上げます。

① 着地の際のガッツポーズ

演技の終了を示すポーズと礼をするまで演技の一部です。着地直後、演技の終了を示すポーズを示す前にガッツポーズをとることは控えてください。

② 演技直前の事前調整

種目移動前の事前の準備での器械の調整は3名までと致します。また、演技直前の器具やマットの準備を急ぐあまり、前の選手が着地のポーズや審判への挨拶を行なっている最中に次の選手やコーチがマット上に上がることをないようにお願いします。また、跳馬や平行棒で跳躍板の移動を行う際に、急ぐあまり跳躍板に手を添えずに跳躍板を倒すような乱暴な扱いは避けてください。

③ マグネシウムや霧吹き、調整器具（ドライバー等）の使用法

準備の際、マグネシウムをばら撒くように使いマットを白く汚したり、霧吹きや雑巾を投げたりするなど乱雑に扱うシーンが見受けられます。また、手に大量にマグネシウムを付けた後、叩いたり、マットやカーペットで擦り落としたりする光景も見られます。器械器具や消耗品を問わず、道具の取り扱いには注意を払うようにお願いします。

平行棒では、霧吹きや雑巾等をマット上に置いたまま、演技をすることは避けて下さい。

鉄棒において、ワイヤー調節のためのドライバー等がゆかの上に乱雑に置かれている場面があります。演技前に片付けるか、所定の場所に置くようにして下さい。

跳馬の助走路にてスタート位置等で目印を付ける場合、5センチ以内までとします（左右の端から端までマグネシウムを塗ることのないようにご注意下さい。）。

④ ローテーション時の移動、整列

種目移動は、出来るだけ速やかにお願いします。整列は全種目とも D 審判席の前をお願いします。また、整列直前での器械やプロテクターの調整は控え、他種目で整列している選手を待たせないようにして下さい。

⑤ 採点間や待機時（ウォームアップ時以外）の選手、コーチの行為について

特別に許可された大会を除き、マットや跳馬の助走路での柔軟や倒立等の練習にあたる行為は控えてください。

演技中の選手を見ながら、コーチが選手席以外に立つことはご注意ください。特にポディウムでない器具設置の場合、審判や観客の視線をさえぎったりしていないか、過度に目立つ場所に立っていないかなど、自身の種目以外からも見られていることにもご配慮ください。

⑥ 髪型や服装、タトゥー

国際大会でタトゥーを入れている他国の選手が見受けられます。文化・風習の違いはありますが、日本においては禁止と致します。また、多くの方が不快に感じる奇抜な髪型や服の着こなしなどは避けてください。体操競技は美を競うスポーツです。アピールは美しい演技で行って下さい。

⑦ 携帯機器の使用

携帯機器をアリーナ内で使用することは禁止されています。競技中は使用を避けて下さい。また、競技会の様子や成績などについて、SNS 等による情報発信は不特定多数が見る場への投稿であることを十分に理解し、「著作権」や「肖像権」も慮り責任をもって対応し、取り扱いには十分ご配慮願います。近年の簡易な通信伝達手段の普及により、様々な情報が瞬く間に伝播されています。大変便利な反面、真偽が判らない情報も制限なく発信されており、選手に関することや発信元が不明なルールに関することなども見受けられます。そのような情報には惑わされることないようにするとともに発信源にならないようご注意下さい。

※ その他、選手・コーチ・審判員は、競技会場内外における自身の行動にもご注意いただき、マナーアップへのご協力をお願い致します。

8. 第 52 回世界体操競技選手権アントワープ大会報告

体操競技男子審判本部

本部長 佐々木 彰文

副本部長 森 直樹

1. 派遣期間：2023 年 9 月 25 日(月)～10 月 10 日(火)
2. 大会名：第 52 回世界体操競技選手権大会 (52ND FIG ARTISTIC GYMNASTICS WORLD CHAMPIONSHIPS)
3. 開催地：ベルギー／アントワープ
4. 審判員：佐々木 彰文（体操競技男子審判本部本部長）
森 直樹（体操競技男子審判本部副本部長）
5. 競技会場：Antwerp Sportpaleis (Schijnpoortweg 119 2170 Merksem)
6. 宿泊先：Mercure Antwerp City Center (Quinten Matsijslei 25, 2018 Antwerp)
7. 日程：大会スケジュール

9 月	25 日	(月)	【出発】成田 22:35⇒ワルシャワ 6:10 ワルシャワ 7:20⇒ブリュッセル 9:30 ブリュッセル 10:10⇒アントワープ 11:00
	26 日	(火)	審判会議 (D 審判のみ)
	27 日	(水)	男子ポディウムトレーニング (Sub1-4) 審判会議 (D 審判のみ)
	28 日	(木)	男子ポディウムトレーニング (Sub5-6) 審判会議 (D 審判のみ) 女子ポディウムトレーニング (Sub1-3)
	29 日	(金)	審判会議 (予選、個人総合決勝ドロー) 女子ポディウムトレーニング (Sub4-10)
	30 日	(土)	男子予選 (Sub1-4) 審判会議 (予選、個人総合決勝ドロー)
10 月	1 日	(日)	審判会議 男子予選 (Sub5-6) 女子予選 (Sub1-3)
	2 日	(月)	女子予選 (Sub4-10)
	3 日	(火)	審判会議 (団体決勝ドロー) 男子団体決勝
	4 日	(水)	女子団体決勝
	5 日	(木)	男子個人決勝
	6 日	(金)	男子 Round Table 女子個人決勝
	7 日	(土)	審判会議 (種目別決勝前半種目ドロー) 種目別決勝 男子 FX、PH、SR 女子 VT、UB
	8 日	(日)	審判会議 (種目別決勝後半種目ドロー) 種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、FX Farewell Banquet
	9 日	(月)	【出発】ブリュッセル 19:35⇒ワルシャワ 21:35 ワルシャワ 22:50⇒成田 18:30
	10 日	(火)	成田 18:30 到着

8. 競技規則：Code of Points 2022-2024
9. 競技方法：C1 予選／C2 個人総合／C3 種目別決勝／C4 団体決勝
10. 器械メーカー：SPIETH
11. 男子参加国・選手数： 60 カ国・218 名
- 1) チーム数 24 ヶ国
- 2) 個人出場 60 カ国 6 種目出場：91 名
- ゆ か：140 名 あん馬：140 名 つり輪：137 名
- 跳 馬：30 名（2 本実施） 平行棒：140 名 鉄 棒：141 名
12. 審判編成
- 1) TC メンバー

担当	氏名	NOC
FIG/MAG 技術委員長	MICKEVICS Arturs	LAT
FX	THOMSON Jeffrey	CAN
PH	ANDREEV Dmitrii	RUS
SR	TOMBS Andrew	GBR
VT	※ HUANG Liping	CHN
PB	MARCOS FELIPE Julio	ESP
HB	ZUNICH Butch Andreja	USA

・2021 年 11 月に開催された FIG 総会により選出された 2024 年までの TC メンバー

※跳馬の HAN Yoon Soo (KOR) 不在のため、代わりに HUANG Liping(CHN)が入った

2) 審判団

- 参加審判員数：48 カ国 71 名（2 名参加国：23 カ国）

内訳 D 審判：12 カ国 12 名（Cat.1：12 名）
E 審判：46 カ国 59 名（Cat.1：5 名、Cat.2：49 名、Cat.3：5 名）

■ D 審判員

	D1		D2	
FX	ALBRECHT Holger	GER	GAZIT Ilan	ISR
PH	RUPCIK Lubos	SVK	CARRILES Pablo	ESP
SR	VUKOJA Mario	CRO	PROVIAS Nikolaos	GRE
VT	REIMERING Vincent	NED	HADJI Mohammed Smail	ALG
PB	BACHMAN Daniel	USA	MAY James	GBR
HB	GIORGADZE Ilia	GEO	BARAKA Tamer	EGY

■ 抽選（DRAW）方法

抽選は予選競技の審判編成から始められた。なお、ドローの対象となるのは国（地域）であり、選出された場合、複数の審判が参加している国は、どちらが入るのか口頭で申告することになる。D 審判は FIG の指名となり、すでに種目に配置されており、E 審判、アシスタントジャッジ、リザーブ審判の順番で抽選が進められた。予選競技の審判編成決定後、個人総合決勝も予選競技同様の手順で抽選が行われた。

団体決勝、種目別決勝の前半、後半の抽選は当日の Judge's Briefing で実施された。抽選対象は、決勝進出国(リザーブは可)を除く審判のみであった。日本はつり輪と跳馬においてリザーブであったためこの 2 種目においては抽選に入ることとなった。

■ 抽選 (DRAW) 結果

○ C1 予選	つり輪	E6	佐々木 彰文
○ C2 個人総合決勝	つり輪	E3	森 直樹
○ C4 団体決勝	ゆか	TIME	森 直樹
○ C3 種目別決勝	つり輪	E6	森 直樹

3) 審判席配置について

試合会場の審判配置は、アリーナ端、観客席前に一列に設置されたレイアウトであった。ゆか跳馬の線審はモニター画面で確認する方式であった。

FIG/MTC メンバーは各種目 1 列に並んだ 1 番端の位置に着席し採点業務にあたっていた。D スコアに差異が生じた場合は D 審判の近くに歩いていき確認をしていた。

13. 審判会議

最初に President の MICKEVICS Arturs 氏より挨拶があり、一般条項についてのプレゼンテーションが行われた。その後ゆかから担当 TC よりローテーションでプレゼンテーションが行われ各種目とも数か所の減点項目の確認や注意点が挙げられ、E スコアの採点練習が 1 種目あたり 4 題実施された。ドローを含めて 4 時間の時間を設定されていたが、時間が足りず約 5 時間の審判会議並びにドローとなった。以下は各種目で取り上げられた項目である。

□ ゆ か

1) 着地について

- ・腰の低い着地（膝が90° 以上上がる実施）については 0.5の減点となる。
- ・着地での脚開きは0.1 or 0.3の減点となる。

2) エンドーの実施について

- ・上半身がゆかに触れる捌きは減点の対象となる。

3) マンナ・脚上挙

- ・マンナは水平から30° の逸脱まではC難度で認めるが0.1の減点がある。また、30° を超えた場合は脚上挙として判定する。

4) その他の確認事項

- ・エンドーロールにて倒立に持ち込む際に脚を開くと0.3の減点となる。
- ・コーナーでの 2 秒以上の停止は0.1の減点となる。
- ・コントロールされていない着地減点について (0.1/0.3/0.5)
- ・連続するタンブリングでのひねり不足減点について (0.1/0.3/0.5)

□ あん馬

1) 交差系の技

- ・ミクラックタイプの技において技が完了する前に脚で支えた場合は不認定となる。
- ・交差倒立においての腰のまがりの減点について0.1/0.3/0.5【News Letter3】
- ・振動を使うことなく力で垂直に脚が上がる捌きは不認定となる。
- ・正交差ひねり倒立で前足が把手間を通るような捌きは0.5の減点で不認定となる。

2) 縦向き移動での角度減点【News Letter3】

- ・縦向きの移動技について、馬端やあん部馬背での支持の際の手のずれは角度逸脱の減点の対象となるが移動する動作での角度逸脱に対する減点はない。例えば縦向き後ろ移動（1/2部分）のあとの中向き正面支持において33° の逸脱があった場合は0.3の減点となる。この逸脱は次の技の移動動作とは認められない。

3) 腰まがりについて

Body extensionや Hip Breaksと表現し、演技全体の旋回での腰のまがりやフロップ・ショーなどで手の持ち替え時の腰のまがり、入れ部分、片腕支持中の腰まがりそれぞれ減点があると説明。開脚旋回での実施やブスナリでの腰のまがりも同様に減点であると説明。

□ つり輪

1) 力技の実施について

- ・振り上がり中水平などのエントリーポジションについて。
- ・引き上げからの力技でのエントリーポジションについて。

2) 十字倒立の実施について

- ・エントリー時の高さについて
- ・最終姿勢の肩の高さについて
- ・静止時の姿勢について
- ・静止時間について
- ・深い握りにについて

3) 中水平支持について

- ・輪の中での水平姿勢が求められる。
- ・肩の位置が高いものは水平支持のC難度として認定する。
- ・両腕が体に近いものは減点の対象となる。

4) 静止時間について

- ・静止時間は厳密に確認する。

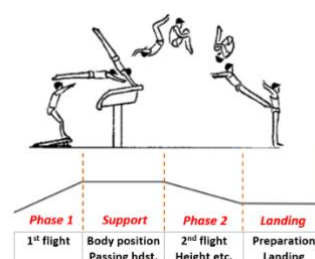
5) 腕のまがりや腰のまがりについて

- ・倒立での身体のそりは減点である
- ・け上がりや振り上がりの際の肘まがり減点である。

□ 跳馬

1) 昨年のリバプール大会からE審判の減点の入力方法が変更された。

・Phase1（第一局面）、Support（着手・体の位置や向き）、Phase2（第二局面）、Landing（着地準備および着地）と4部分に分けてそれぞれの減点を入力する方式となりそれぞれについて説明があった。



○Phase1 (1ST Flight Phase) : 脚の開きや膝のまがり具合について静止画を用いて

0.0/0.1/0.3/0.5の減点説明

○Support : 着手時の身体の姿勢について

馬体を突き放す際の倒立の位置からの逸脱について 0.1/0.3/0.5

○Phase2 (2nd Flight Phase) : 高さ（腰のラインで判定する）・脚の開き・身体の姿勢

0.1/0.3/0.5 動画を用いて減点の説明

○Landings : 低い着地（膝が90°以上まがった着地）について0.5

着地の準備局面・脚の開き・ひねりの逸脱 0.1/0.3/0.5

□ 平行棒

1) 減点の項目の確認

ゆかへの脚のすり・器具へのぶつかり・肘のまがり・膝のまがり・脚開き
棒下・ツイスト・ディアミドフ等での倒立位からの逸脱

2) 特別な減点項目

シャルロの手幅 0.1/0.3

アームスイングの振れ幅 0.1/0.3

モイから即脚前挙は OK

□ 鉄 棒

1) 演技開始時のスイングについて

・予備スイングは3回までとなる。

2) 倒立角度について

3) 技が意図する方向に続かなかった場合

・不認定となり、減点は0.5ではなく0.3となる。

4) 車輪での膝まがり

・0.1と0.3の減点となる。

5) 余分な手の握りかえ

・余分な握りかえは0.1の減点となる

6) 手のずらしについて

7) ケステ、シュタイネマンの捌きについて

・ケステからシュタルダーへ繋げるとケステ C→B となる

8) ツォ・リミンについて

・スタートでのひねり不足の場合0.3の減点がある。

9) 閉脚エンドー、閉脚シュタルダーについて

・回転不足（両脚の入れが不十分）として、0.1、0.3の減点がある。

10) 伸身トカチェフについて

・鉄棒の真上を通過する際、45°以上の腰まがりがあった場合は屈身トカチェフのC難度とする。また、不明確な姿勢として0.3の減点となる。

11) ヤマワキの実施について

・十分な高さ・完璧な伸身姿勢を求める

12) アドラーの入れ方について

・倒立からでなくても減点はなし

14. 新技申請

申請なし

15. 結 果

■団体予選 5-4-3 方式（出場 24 チーム中上位 13 チームのみ掲載）（ ）内は種目順位

※上位 8 カ国が決勝へ進出

※中国・日本・イギリスを除く上位 9 カ国がオリンピック団体出場枠獲得

順	国	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計	
1	日 本	43.166 (1)	42.099 (3)	41.666 (5)	42.965 (7)	44.666 (1)	43.666 (1)	258.228	
2	USA	43.133 (2)	42.366 (2)	41.699 (3)	44.432 (1)	44.399 (2)	38.599 (20)	254.628	
3	GBR	42.832 (4)	43.199 (1)	42.499 (2)	41.966 (18)	43.165 (7)	40.532 (9)	254.193	
4	CAN	42.033 (8)	40.232 (10)	41.699 (3)	42.165 (17)	41.799 (11)	41.332 (3)	249.260	
5	GER	40.333 (19)	41.133 (5)	40.466 (9)	42.365 (14)	43.666 (3)	40.899 (6)	248.862	
6	ITA	41.633 (11)	39.900 (13)	40.166 (11)	43.732 (3)	42.999 (8)	40.366 (12)	248.796	
7	SUI	42.266 (5)	39.632 (14)	39.965 (15)	42.998 (6)	42.699 (10)	40.632 (8)	248.192	
8	CHN	40.833 (15)	37.466 (20)	43.633 (1)	41.966 (18)	43.366 (5)	40.899 (6)	248.163	決勝進出
9	ESP	42.965 (3)	40.200 (11)	40.066 (12)	41.600 (23)	43.232 (6)	39.732 (15)	247.795	
10	TUR	42.232 (6)	39.432 (15)	41.332 (6)	42.732 (9)	41.465 (14)	40.499 (10)	247.692	
11	NED	40.566 (18)	40.699 (8)	40.233 (10)	42.632 (11)	40.766 (18)	41.132 (4)	246.028	
12	UKR	39.899 (21)	40.799 (6)	40.065 (13)	44.065 (2)	43.533 (4)	37.100 (22)	245.461	オリンピック枠
13	BRA	41.666 (10)	38.332 (19)	39.499 (17)	43.133 (4)	41.066 (16)	41.599 (2)	245.295	

■団体決勝 5-3-3 方式（8 チーム出場）（ ）内は種目順位

順	国	予選順位	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	 日 本	1	41.666 (4)	41.532 (1)	41.499 (3)	44.533 (2)	44.432 (1)	41.932 (1)	255.594
2	 CHN	8	41.933 (3)	40.866 (2)	43.832 (1)	43.299 (4)	44.365 (2)	39.499 (5)	253.794
3	 USA	2	42.698 (1)	39.633 (6)	41.466 (4)	44.166 (3)	43.166 (3)	41.299 (3)	252.428
4	GBR	3	41.299 (6)	40.432 (4)	41.666 (2)	44.599 (1)	42.432 (4)	39.033 (7)	249.461
5	SUI	7	39.399 (8)	40.165 (5)	39.899 (7)	42.299 (7)	41.232 (6)	41.432 (2)	244.426
6	GER	5	41.466 (5)	40.532 (3)	40.332 (6)	41.432 (8)	41.198 (7)	39.066 (6)	244.026
7	CAN	4	40.166 (7)	39.066 (7)	41.066 (5)	42.766 (6)	41.799 (5)	38.165 (8)	243.028
8	ITA	6	41.999 (2)	36.499 (8)	39.899 (7)	43.299 (4)	39.432 (8)	40.032 (4)	241.160

◆団体決勝におけるスコア比較

Dスコア									Eスコア								
	FX	PH	SR	VT	PB	HB	TOTAL	RANK		FX	PH	SR	VT	PB	HB	TOTAL	RANK
日本	18.0	18.4	17.6	16.8	18.7	17.0	106.5	1		23.666	23.132	23.899	27.733	25.732	24.932	149.094	1
CHN	17.5	16.2	18.8	16.0	18.9	17.4	104.8	2		24.533	24.666	25.032	27.299	25.465	22.099	149.094	1
USA	17.7	17.2	17.0	17.2	18.6	16.4	104.1	3		25.098	22.433	24.466	27.166	24.566	24.899	148.628	3
GBR	18.6	18.0	17.2	17.2	17.3	15.4	103.7	4		23.199	22.432	24.466	27.499	25.132	23.633	146.361	4
SUI	16.8	16.7	15.0	16.0	17.6	16.9	99.0	5		23.199	23.465	24.899	26.399	23.632	24.532	146.126	6
GER	16.7	16.6	15.5	15.6	17.5	15.9	97.8	6		24.766	23.932	24.832	25.932	23.698	23.166	146.326	5
CAN	17.1	15.7	16.3	15.6	16.9	15.6	97.2	7		23.166	23.366	24.766	27.366	24.899	22.565	146.128	7
ITA	16.9	15.8	14.6	16.0	16.7	16.2	96.2	8		25.099	20.699	25.299	27.399	22.732	23.832	145.060	8

■**個人総合予選** (91 名出場中上位 8 位のみ掲載) ()内は種目順位

※上位 24 名が決勝進出 (各国 2 名まで)

※日本とイタリアはそれぞれ 3 選手が予選通過ラインに入り、内 2 選手の決勝出場者を国で選んだ。

順	選 手	国	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	千葉 健太	日本	13.900 (37)	14.700 (6)	13.666 (31)	14.333 (36)	14.700 (10)	14.500 (3)	85.799
2	萱 和磨	日本	14.100 (26)	14.066 (17)	14.200 (10)	14.266 (45)	14.800 (8)	14.166 (7)	85.598
3	橋本 大輝	日本	14.500 (6)	13.266 (50)	13.700 (28)	14.366 (32)	14.600 (13)	15.000 (1)	85.432
4	JARMAN Jake	GBR	14.366 (11)	13.900 (20)	13.233 (56)	14.000 (78)	14.566 (14)	13.966 (12)	84.031
5	HALL James	GBR	13.966 (32)	14.033 (18)	13.833 (20)	13.500 (114)	14.466 (17)	13.833 (18)	83.631
6	RICHARD Frederick	USA	14.600 (2)	14.200 (15)	13.400 (45)	14.533 (14)	14.600 (12)	12.233 (108)	83.566
7	KARIMI Milad	KAZ	14.500 (7)	12.200 (97)	13.166 (60)	14.566 (11)	14.200 (31)	14.600 (2)	83.232
8	HONG Asher	ISR	14.300 (13)	13.100 (60)	13.966 (17)	14.766 (6)	14.833 (6)	12.200 (109)	83.165

■**個人総合決勝** (24 名出場中上位 8 位のみ掲載) ()内は種目順位

順	選 手	国	予選順位	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	 橋本 大輝	日本	3	13.466 (17)	14.366 (2)	14.000 (2)	15.000 (2)	14.800 (3)	14.500 (1)	86.132
2	 KOVTUN Illia	UKR	18	14.000 (6)	14.300 (3)	13.133 (12)	14.333 (7)	15.166 (2)	14.066 (5)	84.998
3	 RICHARD Frederick	USA	5	14.633 (1)	13.733 (5)	13.500 (7)	14.566 (3)	14.600 (7)	13.300 (15)	84.998
4	千葉 健太	日本	1	13.966 (7)	14.800 (1)	13.733 (5)	13.666 (24)	14.666 (5)	12.633 (20)	83.464
5	KARIMI Milad	KAZ	6	14.366 (3)	13.000 (18)	12.966 (17)	14.233 (10)	14.100 (12)	14.266 (2)	82.931
6	ABBADINI Yumin	ITA	10	13.866 (8)	13.800 (4)	13.300 (10)	13.900 (18)	13.933 (13)	14.033 (6)	82.832
7	SUN Wei	CHN	13	13.333 (20)	12.300 (21)	14.266 (1)	14.166 (12)	14.400 (9)	14.233 (3)	82.698
8	SEIFERT Noe	SUI	11	13.833 (9)	13.566 (8)	13.366 (8)	14.100 (14)	14.766 (4)	12.800 (19)	82.431

◆個人総合におけるスコア比較

		Dスコア							
		FX	PH	SR	VT	PB	HB	TOTAL	RANK
橋本 大輝	日本	5.8	6.0	5.8	5.6	6.1	6.0	35.3	2
KOVTUN	UKR	5.9	6.0	5.3	5.2	6.7	6.1	35.2	3
RICHARD	USA	6.0	5.7	5.2	5.2	6.0	5.8	33.9	5
千葉 健太	日本	5.7	6.2	6.0	5.2	6.1	5.3	34.5	4
KARIMI	KAZ	6.3	5.3	4.4	5.2	5.9	6.3	33.4	6
ABBADINI	ITA	5.4	5.5	4.7	4.8	5.5	5.9	31.8	8
SUN	CHN	5.7	6.2	5.9	5.6	6.1	6.1	35.6	1
SEIFERT	SUI	5.7	5.7	5.0	4.8	6.3	5.5	33.0	7

Eスコア							
FX	PH	SR	VT	PB	HB	TOTAL	RANK
7.666	8.366	8.200	9.400	8.700	8.500	50.832	2
8.100	8.300	7.833	9.133	8.466	7.966	49.798	4
8.633	8.033	8.300	9.366	8.600	7.500	50.432	3
8.366	8.600	7.733	8.566	8.566	7.333	49.164	6
8.066	7.700	8.566	9.133	8.200	7.966	49.631	5
8.466	8.300	8.600	9.100	8.433	8.133	51.032	1
7.933	6.100	8.366	8.566	8.300	8.133	47.398	8
8.133	7.866	8.366	9.300	8.466	7.300	49.431	7

■種目別決勝（各種目 8 名出場）

□ゆ か

順	選手名	国	D スコア	E スコア	ND	得 点	予選 D	予選順位
1	 DOLGOPYAT Artem	ISR	6.4	8.466		14.866	6.4	1
2	 南 一輝	日本	6.5	8.166		14.666	6.2	4
3	 KARIMI Milad	KAZ	6.3	8.300		14.600	6.3	7
4	YULO Carlos Edriel	PHI	6.3	8.200		14.500	6.3	3
5	DOLCI Felix	CAN	6.0	8.400		14.400	6.0	5
6	HEPWORTH Harry	GBR	6.4	8.133	0.2	14.333	6.4	8
7	橋本 大輝	JPN	6.0	8.333	0.1	14.233	6.0	6
8	RICHARD Frederick	USA	6.0	7.200		13.200	6.0	2

□あん馬

順	選手名	国	D スコア	E スコア	ND	得 点	予選 D	予選順位
1	 Mc CLENAGHAN Rhys	IRL	6.4	8.700		15.100	6.4	3
2	 YOUNG Khoi	USA	6.5	8.466		14.966	6.6	2
3	 ABU AL SOUD Ahmad	JOR	6.4	8.233		14.633	6.4	4
4	MERDINYAN Harutyun	ARM	6.1	8.600		14.600	6.0	7
5	WHITLOCK Max	GBR	6.9	7.400		14.300	6.8	1
6	千葉 健太	日本	6.1	8.100		14.200	6.1	6
7	DUNKEL Nils	GER	6.2	7.566		13.766	6.2	8
8	LEE Chih Kai	TPE	6.5	7.000		13.500	6.2	5

□つり輪

順	選手名	国	D スコア	E スコア	ND	得 点	予選 D	予選順位
1	 LIU Yang	CHN	6.4	8.833		15.233	6.4	1
2	 PETROUNIAS Eleftherios	GRE	6.3	8.766		15.066	6.3	2
3	 YOU Hao	CHN	6.7	8.133		14.833	6.5	3
4	DAVTYAN Vahagn	ARM	6.0	8.700		14.700	5.9	6
5	SIMONOV Nikita	AZE	6.2	8.466		14.666	6.2	4
6	HOECK Vinzenz	AUT	6.1	8.466		14.566	6.1	5
7	AVETISYAN Artur	ARM	5.9	8.533		14.433	5.9	6
8	HEPWORTH Harry	GBR	5.8	8.300		14.100	5.8	8

□跳 馬

順	選手名	国	D スコア	E スコア	ND	得 点	決定点	予選 D	予選順位
1	 JARMAN Jake	GBR	6.0 5.6	9.400 9.100		15.400 14.700	15.050	6.0 5.6	1
2	 YOUNG Khoi	USA	5.6 5.4	9.433 9.266		15.033 14.666	14.849	5.6 5.4	2
3	 CHEPURNYI Nazar	UKR	5.6 5.6	9.233 9.200	0.1	14.833 14.700	14.766	5.6 5.6	3
4	RADIMLOV Igor	UKR	5.6 5.6	9.300 9.000		14.900 14.600	14.750	5.6 5.6	6
5	JUDA Paul	USA	5.6 5.2	9.100 9.300	0.1	14.600 14.500	14.550	5.6 5.2	4
6	DAVTYAN Artur	ARM	5.6 5.6	8.666 9.533	0.3	13.966 15.133	14.549	5.6 5.6	5
7	HEPWORTH Harry	GBR	5.6 5.6	9.033 9.033	0.1 0.3	14.533 14.333	14.433	5.6 5.6	6
8	PENEV Kevin	BUL	5.2 5.2	8.966 9.300	0.3	14.166 14.200	14.183	5.2 5.2	8

□平行棒

順	選手名	国	D スコア	E スコア	ND	得 点	予選 D	予選順位
1	 DAUSER Lukas	GER	6.6	8.800		15.400	6.6	1
2	 SHI Cong	CHN	6.3	8.766		15.066	6.3	5
3	 杉本 海誉斗	日本	6.3	8.700		15.000	6.3	3
4	萱 和磨	日本	6.3	8.433		14.733	6.3	8
5	KOVTUN Illia	UKR	6.4	8.233		14.633	6.7	2
6	HONG Asher	USA	6.0	8.466		14.466	6.0	6
7	LEVANTESI Matteo	ITA	6.4	7.466		13.866	6.2	7
8	MOLDAUER Yul	USA	6.3	6.833		13.133	6.6	4

□鉄 棒

順	選手名	国	D スコア	E スコア	ND	得 点	予選 D	予選順位
1	 橋本 大輝	日本	6.7	8.533		15.233	6.6	1
2	 SRBIC Tin	CRO	6.1	8.600		14.700	5.9	4
3	 SU Weide	CHN	5.9	8.600		14.500	6.0	5
4	KARIMI Milad	KAZ	6.3	8.133		14.433	6.3	2
5	JUDA Paul	USA	5.4	8.700		14.100	5.4	6
6	MARIANO Arthur	BRA	6.2	7.333		13.533	5.8	9
7	千葉 健太	日本	5.4	7.300		12.700	5.7	3
8	DOLCI Felix	CAN	5.0	6.100		11.100	5.7	8

◆国別メダル獲得数

				計
日本	3	1	1	5
CHN	1	2	2	5
USA		2	2	4
UKR		1	1	2
GER	1			1
GBR	1			1
IRL	1			1
ISR	1			1
CRO		1		1
GRE		1		1
JOR			1	1
KAZ			1	1

◆種目別メダル獲得国

			
団 体	日本	CHN	USA
個人総合	日本	UKR	USA
ゆ か	ISR	日本	KAZ
あん馬	IRL	USA	JOR
つり輪	CHN	GRE	CHN
跳 馬	GBR	USA	UKR
平行棒	GER	CHN	日本
鉄 棒	日本	CRO	CHN

16. 種目別決勝メダリストの演技構成

◆ ゆ か

1位 DOLGOPYAT Artem (ISR) 14.866 【D:6.4 E:8.466】

後方伸身宙返り 2 回宙返り 2 回ひねり (F)、前方伸身宙返り 1 回ひねり (C)～前方屈身 2 回宙返り (E)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり (D)～前方かかえ込み 2 回宙返り (D)、前方伸身宙返り 2 回ひねり (D)～前方伸身宙返り (B)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)、フェドルチェンコ (C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり (D)

2位 南 一輝 (日本) 14.666 【D: 6.5 E : 8.166】

後方かかえ込み 2 回宙返り 5/2 ひねり (F)～前方伸身宙返り 1 回ひねり (C)、リ・ジョンソン (G)、シライ 2 (F)、正面支持臥から伸腕屈身力倒立 (B)、後方伸身宙返り 3/2 ひねり (C)、前方伸身宙返り 5/2 ひねり (E)、後方宙返り 5/2 ひねり (D)、前方伸身宙返り 2 回ひねり (D)、後方伸身宙返り 3 回ひねり (D)

3位 KARIMI Milad (KAZ) 14.600 【D:6.3 E:8.300】

前方伸身宙返り 5/2 ひねり (E)、前方伸身宙返り 1 回ひねり (C)～前方屈身 2 回宙返り (E)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり (D)～前方かかえ込み 2 回宙返り (D)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)、後方伸身宙返り 2 回ひねり (C)、開脚座から伸腕屈身力十字倒立 (C)、前方伸身宙返り 2 回ひねり (D)、後方伸身宙返り 3 回ひねり (D)

◆ あん馬

1位 Mc CLENAGHAN Rhys (IRL) 15.100 【D : 6.4 E : 8.700】

逆交差倒立 (C)、G コンバイン (G)、E フロップ (E)、あん部馬背ロシアン 1080°転向 (E)、ループ (B)、マジヤール (D)、シバド (D)、ウ・グォニアン (E)、馬端馬背ロシアン 1080°転向 (D)、DSA 倒立 3/3 部分移動 450°ひねり下り (E)

2位 YOUNG Khoi (USA) 14.966 【D : 6.5 E : 8.466】

リーニン (D)、ブスナリ (F)、1 回の旋回で横移動 (D)、D コンバイン (D)、E フロップ (E)、ウ・グォニアン (E)、縦向き前移動両把手を越えて (E)、シバド (D)、ロス (D)、ループ倒立 3/3 部分移動 270°ひねり下り (D)

3位 ABU AL SOUD Ahmad (JOR) 14.633 【D : 6.4 E : 8.233】

ミクラック (D)、バンメン (E)、ニンレイズ 2 (E)、トンフエイ (D)、縦向き前移動両把手を越えて (E)、シバド (D)、D コンバイン (D)、ショーン (E)、D フロップ (D)、ループ倒立 3/3 部分移動 270°ひねり下り (D)

◆ つり輪

1位 LIU Yang (CHN) 15.233 【D:6.4 E:8.833】

バランディン 2 (F)、後ろ振り上がり十字倒立 (E)、ジョナサン (D)、ホンマ十字懸垂 (D)、十字懸垂から伸腕伸身中水平支持 (E)、ヤマワキ (C)、後ろ振り上がり中水平支持 (E)、ナカヤマ (D)、後ろ振り上がり倒立 (C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

2位 PETROUNIAS Eleftherios (GRE) 15.066 【D:6.3 E: 8.766】

ヤン・ミンヨン(E)、ザネッティ(F)、ジョナサン(D)、ホンマ十字懸垂(D)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ほん転逆上がり倒立(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ナカヤマ(D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

3位 YOU Hao (CHN) 14.833 【D:6.7 E:8.133】

バランディン 2(F)、バランディン 3(E)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ほん転逆上がり倒立(C)、オニール(E)、アザリアン(D)、ジョナサン(D)、ホンマ十字懸垂(D)、十字懸垂から伸腕伸身中水平支持(E)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(F)

◆ 跳 馬

1位 JARMAN Jake (GBR) 15.050

1 本目：ヨネクラ	15.400 【D:6.0 E:9.400】
2 本目：ドラグレスク	14.700 【D:5.6 E:9.100】

2位 YOUNG Khoi (USA) 14.849

1 本目：ヨー2	15.033 【D:5.6 E:9.433】
2 本目：ロンダート、ひねり前転とび前方伸身宙返り 2 回ひねり	14.666 【D:5.4 E:9.266】

3位 CHEPURNYI Nazar (UKR) 14.766

1 本目：ドラグレスク	14.833 【D:5.6 E:9.233】
2 本目：ロペス	14.700 【D:5.6 E:9.200 ND:0.1】

◆ 平行棒

1位 DAUSER Lukas (GER) 15.400 【D: 6.6 E: 8.800】

棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、ソラキディス(G)、リチャード(E)、前振り上がりひねり倒立(E)、マクーツ(E)、ヒーリー(D)、ディアミドフ(C)、前振りひねり倒立(C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(E)

2位 SHI Cong (CHN) 15.066 【D:6.3 E:8.766】

リチャード(E)、マクーツ(E)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、ケンモツ(C)、前方宙返り開脚抜き腕支持(D)、バブサー(E)、ティッペルト(D)、ヒーリー(D)、後方屈身 2 回宙返り下り(D)

3位 杉本 海誉斗 (日本) 15.000 【D: 6.3 E: 8.700】

後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持(D)、ヒーリー(D)、前振り上がりひねり倒立(E)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、ケンモツ(C)、前方宙返り開脚抜き腕支持(D)、バブサー(E)、ティッペルト(D)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(E)

◆ 鉄 棒

1位 橋本 大輝 (日本) 15.233 【D : 6.7 E : 8.533】

アドラーひねり倒立(D)～リュウキン(F)、カッシーナ(G)、コールマン(E)、伸身トカチェフ(D)～トカチェフ(C)、アドラー1回ひねり逆手倒立(E)、シュタルダー(B)、クースト(C)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(E)

2位 SRBIC Tin (CRO) 14.700 【D : 6.1 E : 8.600】

前方車輪1回ひねり大逆手(C)、前方車輪(A)、アドラーひねり倒立(D)～伸身ピアッティ(E)、ピアッティ(D)～伸身トカチェフ(D)、コールマン(E)、アドラー1回ひねり逆手倒立(E)、シュタルダー(B)、後方伸身2回宙返り1回ひねり下り(D)

3位 SU Weide (CHN) 14.500 【D : 5.9 E : 8.600】

アドラー1回ひねり片逆手倒立(D)、アドラーひねり倒立(D)、リュウキン(F)、伸身トカチェフ(D)、コールマン(E)、後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂(C)、順手背面車輪(D)、シュタイネマン(B)、シュタルダー(B)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(E)

17.所 感

2013年大会以来10年振りにベルギー/アントワープで世界選手権が開催された。昨年大会（イギリス/リバプール）において団体3位までに入った中国・日本・イギリスは、すでに来年開催されるパリオリンピックへの出場権を獲得しているが、残りの団体9枠は本大会の予選の結果で決定されるため、各国にとってとても重要度の高い世界選手権となった。

世界選手権では例年100名を超える審判員が各国から招集されるが、昨年のリバプール大会では77名、今大会では71名と年々減少傾向にある。これは、近年は前年の世界選手権やその年の大陸間大会が世界選手権の予選となっており、参加人数（国数）が大会を重ねるごとに絞られてきていることも要因の一つであると考えられる。

ポディウムトレーニングは例年通り実際の競技時間帯で行われた。以前まではこのポディウムトレーニング開始前に審判会議および講習、審判編成を決める抽選（ドロー）が実施され、その後、全審判員がアリーナ内で2日間にわたるトレーニングの見学が義務付けられていた。その際、各種目の審判席周辺には実際にその種目を担当する審判員が集まり、通し練習を行う選手の演技を採点しながらDスコアやEスコアの確認を審判同士で行い、準備をしていた。しかし、近年はポディウムトレーニングの後に審判会議およびドローを行うようになった上に、ポディウムトレーニングの見学は予め指名されたD審判のみが必須となり、その他の審判は任意で観客席から見学するスタイルに変わってきた（アリーナ内に立ち入ることはできない）。これはすなわち、事前に審判同士でスコアを確認することによって起こり得る弊害を失くし、大会をより公平公正に行えるようにしたいというFIGの意図があると推測される。これにより、審判員として参加した我々も実際に競技会が始まるまで技の認定に関する基準や減点（Eスコア）の傾向を知ることはできなかった。なお、この方法は世界選手権だけでなく、今年開催されたユニバーシティゲームスやアジア競技大会においても同様であった。しかしながら、ポディウムトレーニングの重要性は選手にとっても審判員にとっても重要なことに変わりはない。日本はやや失敗は見られたものの、全体的には良い動きの中でトレーニングを行うことができていた。一方ライバルの中国は器械の違いに調整ができなかったためかは不明だが、すべての種目においてミスを連発し、覇気のみられないトレーニング内容であった。また、中国は直前に開催されたアジア大会に主力メンバーを

出場させていたため、今大会の出場メンバーはベストメンバーでは無かったことも少なからず影響していたように感じた。

審判会議では、各種目の担当TC（技術委員）よりそれぞれの種目における技の認定や減点の幅など、採点の方向性についての解説がトータル4時間超えで実施された。具体的な会議内容は前述したが、評価に値する美しさや表現力、雄大性、技捌き等に関する内容は皆無であり、各種目における角度や静止時間、着地の姿勢、着地の減点が主な内容となり、E審判は機械的に減点をしなければならないことに多少の違和感を覚えたが、やはり、どの選手にも公平に採点するためには、目に見える明確な基準に合わせる必要があることも同時に感じた講習であった。

ドローの結果、我々日本の審判員は偶然にも予選および個人決勝、種目別決勝においてつり輪のE審判を担当することとなった。競技直前に毎回行われる種目ごとのミーティング（5分程度）では振動からの力静止技における次の5項目についての減点の説明が強調された。①静止姿勢に持ち込む際の肩の高さ（角度）、②最終静止位置での肩の高さ（角度）、③静止姿勢、④静止時間、⑤手首の巻き込み。このような打ち合わせの影響により、振動からの力静止技（特に十字倒立）に対する減点が非常にシビアにされた印象をもった。また、決勝あたりからはバランディン系の技は明確な懸垂姿勢から全経過伸腕かつ伸身で実施しなければならないといった説明が追加された。

予選において日本はあん馬やつり輪にミスが出たもののベスト3は確保し、合計258.228で首位通過し、その後にアメリカとイギリスが続いた。中国は248.163の8位で予選を通過した。中国はポディウムトレーニング同様に落下等の大欠点を連発し、9位のスペインとわずか0.368差であり、あわや予選落ちといった演技内容で上位8位までが通過となる団体決勝にギリギリの順位で駒を進めた。しかし、決勝は予選の得点を持ち越さない上に、昨年のリバプール大会の予選では首位の日本と10.766の差があったものの、決勝では大幅に得点を伸ばし、結果2位の日本に逆に4.463の差をつけて優勝した実績を考えると、決して予断を許さない状況であることは間違いなかった。なおかつ、決勝では、アジア大会に出場したLIN Chaopanを招集させて演技をさせるといった情報もあり、日本は1位で予選を通過したものの、優位な状況であるとは微塵も感じなかった。

団体決勝では、日本はゆかにおける着地の乱れや、あん馬における落下、つり輪における振動からの力技における姿勢不良、鉄棒において意図する方向に技が続かないなどのミスが起こり、4種目で予選の得点を下回った。しかしながら、同じ種目でミスを繰り返さなかったことや、平行棒と鉄棒において全選手が着地を止めたことなどが高い評価を得て、合計255.594で8年ぶりに団体金メダルを獲得することができた。一方中国はLIN Chaopanの加入でチームに勢いがつき予選よりも大幅に得点を上げてきたが、鉄棒における2度の落下が影響し合計253.794で2位となった。日本と中国の差はわずか1.800であり、Eスコアのみ合計は偶然にも149.094の同スコアであった。もし中国がベストの演技をしていた場合は結果が変わっていた可能性も十分にありえると感じた。

今大会を振り返った上で感じた採点の傾向を次に挙げる。ゆかは着地姿勢と着地の安定性が重要であり、着地の際の脚の開きも減点の対象となっていた。あん馬では倒立技の停滞や腰まがり、旋回における腰まがりがない演技が評価されていた。つり輪では中水平や十字倒立の姿勢不良がある場合は複数の減点がなされ、不明瞭である場合は不認定もしくは低い難度で認定していた。跳馬においては大きさ（+距離）のある演技には高い得点が出ていた。平行棒では倒立完了する技において、手ずらしのない正確な倒立の収めが重要であると感じた。鉄棒ではアドラー系の技での角度逸脱や、腰まがりのある伸身トカチェフの認定や減点がシビアに行われていた印象をもった。

今大会において日本は団体総合・個人総合（橋本大輝）・種目別鉄棒（橋本大輝）で金メダル3個、種目別ゆか（南一輝）で銀メダル、種目別平行棒（杉本海誉斗）で銅メダルと、5個のメダルを獲得することができ、間近に迫ったパリオリンピックに向けて良い弾みがついたと感じている。日本の選手の皆さんにおいては、パリオリンピックでの金メダル獲得を目標に、引き続き日々のトレーニングを継続していただきたいと切に願っている。

9. おわりに

審判委員会
体操競技男子審判本部
本部長 佐々木 彰文

2013 年大会以来 10 年ぶりにベルギー/アントワープで世界選手権が開催され、男子団体総合では 255.594 で 2 位の中国に 1.800 の差をつけ 8 年ぶりに団体金メダルを獲得することができた。また、個人総合においても橋本大輝選手が 86.132 で金メダルを獲得し、昨年のイギリス/リバプールでの世界選手権に続き 2 連覇を達成した。さらに、種目別においてもゆかで南選手が銀メダル、平行棒で杉本選手が銅メダル、鉄棒で橋本選手が金メダルを獲得し、国別メダル獲得数では出場国の中で一番多いメダル数となった。

団体決勝上位 4 カ国の得点を比較してみると日本はあん馬・平行棒・鉄棒においてはチーム得点において出場 8 カ国の中でトップの得点であったが、ゆかでは着地が乱れる場面が多く、トップのアメリカに 1.032 差をつけられ、つり輪ではライバル中国に予選での 1.967 の差が、決勝では 2.333 と更に大きく開いた結果となった。団体決勝での上位 4 カ国（日本・中国・アメリカ・イギリス）の D スコアの平均をみると、ゆかや跳馬においてイギリスがトップのスコアとなっており力をつけてきていることがわかる。ゆかでは JARMAN Jake 選手が出場選手トップの D スコア 6.7 の実施であったり、跳馬では 3 選手が 2 本の跳越を実施しその跳越内容においても D スコア 5.6 以上の技である、ヨー 2・ドラグレスク・リセガン・ヨネクラとバラエティーに富んだ 2 本を実施していた。団体決勝上位 8 チームの中で D スコア 6.0 の跳越を実施したチームはイギリスとアメリカだけであった。残念ながら着地で大きく動くような実施があったため大きな得点には結び付かなかったが、着地まで纏めてきた際には非常に大きな得点源の種目となる。跳馬において D スコア 6.0 の実施ができる選手が国にいることは非常に大きいと感じるとともに今後日本にとってライバルとなる可能性も感じるイギリスであった。中国は団体予選を 8 位で通過となり、決勝は跳馬からのスタートであったが、3 種目めの鉄棒で二度の落下がありそれが決め手となり団体総合で日本に続く 2 位となった。日本と中国との D スコアを比べてみると昨年のイギリス/リバプールでの世界選手権と同様に長年苦勞してきた D スコアの合計で上回ることができた。また E スコアにおいては 149.094 と日本と中国は同点のスコアであったため、結果として D スコアの差での優勝となった。また、今大会においては同時期に中国にてアジア競技大会が開催された関係から、中国の代表メンバーがアジア競技大会と世界選手権に分散する形での出場となったため、本来なら世界選手権に出場してくるであろう ZHANG Boheng 選手や ZOU Jingyuan 選手が不在での世界選手権となった。アジア競技大会の結果をみると団体総合では 262.025 で中国が優勝し、個人総合においても ZHANG Boheng 選手が 89.299 で優勝となる他、種目別においても平行棒において ZOU Jingyuan 選手が 15.933 で優勝、鉄棒において ZHANG Boheng 選手が 15.100 で優勝となった。この結果をみても日本にとって非常に怖い存在である。来年 2024 年のパリオリンピックでは上記 2 名の選手もチームとして出場する可能性が高いことから、日本の今後の大きな課題としてつり輪や平行棒での得点差をいかに抑えるか、また他の種目でスコアアップのためにも全種目を通じて着地の重要性が非常に大きな比重として捉えることができる。

いよいよ来年に迫った 2024 フランス/パリオリンピックであるが、改めて着地へのこだわりを高めより一層の取り組みを期待している。本情報には FIG からの通達、採点規則の追加情報、採点指針などがまとめられているため、関係者の皆さまには十分に内容を把握しご活用頂きたい。

日本の美しい体操が世界で活躍することを祈念し、挨拶とする。